

7616

伊達大騒動

伊東凌潮口演



米國文學士高橋鋤郎君著

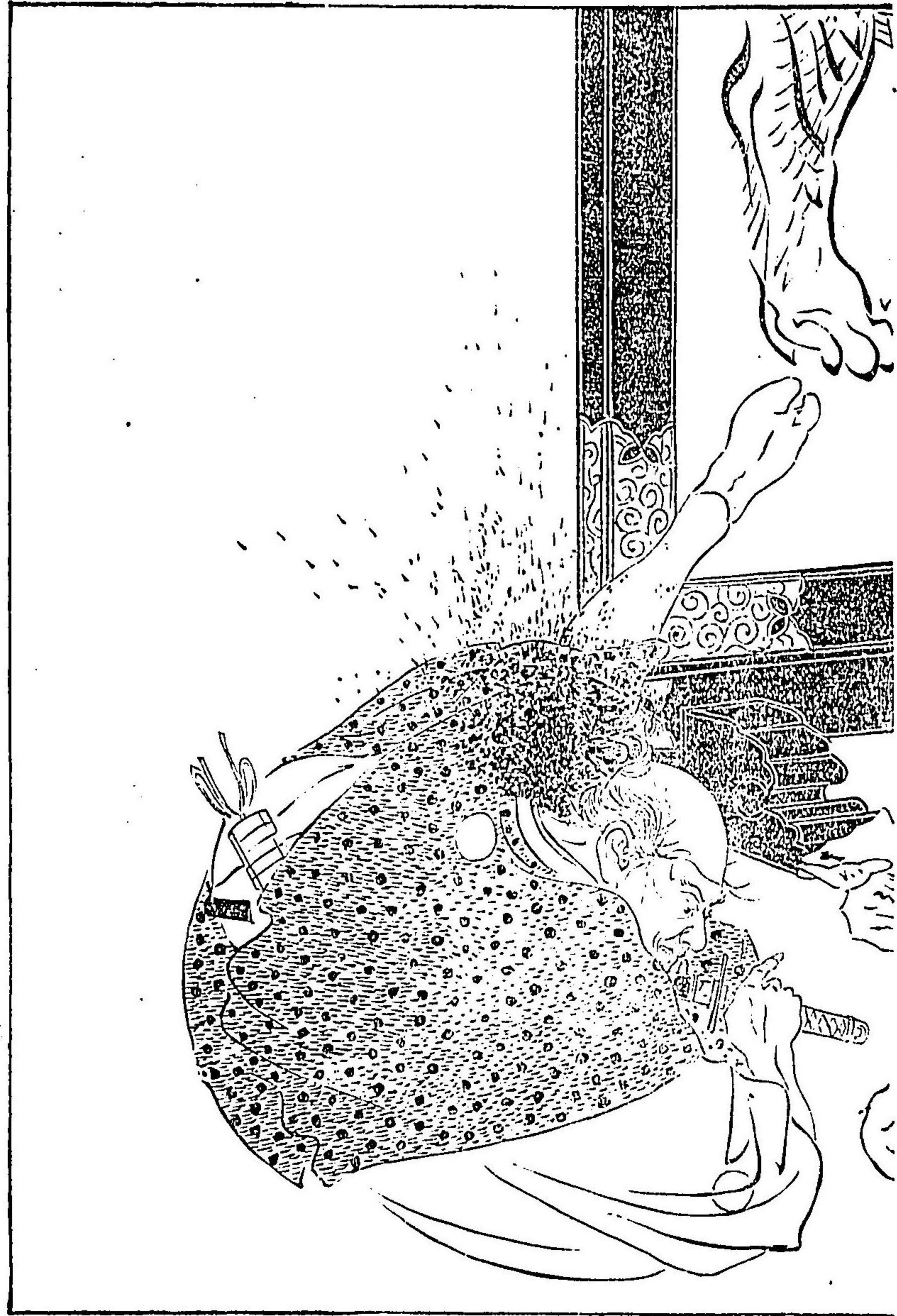
實業  
秘訣  
商人百話

全一冊

正價金三十錢

本書は學理と經驗とに依り商業上の要点を談話体に説きたるものにして商業の秘訣擧げて巻中に收む内地雜居目前に在る今日商業子弟欠く可からざる良書あり





明治三十二年改正

傍訓 改正諸税法

全一冊 正價金十二錢

- 登録税法
- 所得税法
- 印紙税法
- 營業税法
- 酒造税法
- 混成酒税法
- 沖繩縣酒類出港税則
- 醫藥用工業用酒精に關する法律
- 醬油税法及施行法
- 關税法
- 關稅定率法附屬輸入表中改正法律
- 噸税法
- 改正郵便税法

特8

507

伊達大騷動

伊達大騷動

伊藤凌潮講演 速記社々員速記

第一席

今(いま)回(かい)辨(わ)じますは伊達騷動といふ注(しゆ)文(ぶん)に隨(したが)ひ伊達大評定或(ある)ひは伊達顯秘録等の諸書及び黑白論を取調(しら)べまして確乎(たしか)たる實説(じつせつ)を言(い)上(あ)げ仕(つか)つりますが之(これ)は他(ほか)に比類(ひるい)なき伊達騷動の實(じつ)証(しやう)で伊達を言(い)す……扱(つか)て奥州仙臺の伊達左京大夫藤原の政宗朝臣(まさむねのちまうぢい)と申(まを)されますは其(その)祖先(せんぜん)大職冠(おほしやくかん)足(あ)し公(こう)の二(に)男(おとこ)房(ふさ)前(まへ)大臣(だいじん)より七(しち)代(だい)に山陰中納言政朝卿の嫡孫(ちやくそん)十世(じゆしせい)の後(のち)藏(くら)人(にん)朝宗(ちゆうそう)といふ人(ひと)常陸(とくろ)の山中(やまなか)に住(す)居(ぐ)せられ其(その)子(こ)常陸介(とくろのすけ)の嫡子(ちやくし)爲(な)り宗二(むねじ)男(おとこ)爲(な)り重三(むねさん)男(おとこ)祐綱(すけあき)の四(よ)人(にん)俱(く)に武勇(ぶゆう)の名(な)高(たか)き方(かた)々(々)で座(ざ)りました文治五年(ぶんぢごねん)の

伊達大騷動

秋頼朝公奥州征伐の砌り伊達郡澤原邊に進み武勇を現はし小  
勢をもつて大軍を破りしのみならず數度の戦場に手柄を現はし  
た廉奥羽平均の後常陸介父子の軍忠を感し給ひ伊達郡を下  
賜はり爲家九代の孫大膳太夫政宗とやされまする文武兩道兼備  
の良將で出羽の國長竹の庄まで切從がひ一城を築き是れに移ら  
れました此城を米澤と申す此政宗より四代の孫兵部大輔成  
宗は足利義尚將軍に謁し其後宗時輝宗と相傳へました此輝宗米  
澤に在城して山形城城主最上修理大夫義盛の息女を室とせられ  
まして永録十年八月三日に元服して伊達藤次郎政宗と改名致さ  
けられ天正五年十一月に元服して伊達藤次郎政宗と改名致さ  
れました先祖の政宗の英勇を慕はれて名乗りましたもので座  
いす政宗は豊太閤秀吉公北條征伐の砌り諸侯より後れて秀吉  
公に謁見し大坂落城の節は關東に從がひ大坂方の爲めに敗軍に

伊達大騷動

及びました事はあれども伊達家に限りません關東の大軍展々敗  
軍した又たは諸口の奇手皆な敗走した事は世の人の熟知せられ  
しは話しゆる略しす此政宗に伊達子數多座いまして其後忠宗  
朝臣には伊達陸奥守と名乗られ家光公家綱公と二代の將軍に勤  
任されました其頃伊達家より將軍家へ屢々願はれました一々は  
東照大神君は自筆にて政宗へは恩賞の由神文の抄直判を下し置  
れました天下一統の後に至つては右神文の抄沙汰がありま  
せんに依つては代々の將軍家へ願ひに相成ります其事行な  
はれませんから忠宗の代に及び伊達家より出願の件に對しては  
老中阿部豊後守忠秋殿松平伊豆守殿酒井雅樂頭殿其外歴々の  
孝評議に相成りました其時井伊掃部頭直孝殿進み出られて直  
孝此儀の仔細なく相濟ませずさん道は神君より家光公まで  
伊三代伊取上げなき事を今更に相談に及びすべきや……と聞

伊達大騒動

て阿部豊後守殿進み出て 阿部掃部頭殿の仰せ  
遣は神君の神文をもつて願ひ出たる儀なれば奈何にも難  
なる事と存じまするに聞かされて同席の方々此義然るべし  
存じまするに聞かされて同席の方々此義然るべしと即刻三家  
問合せになりまして所存の三家にも神君の印形用ひ難し  
は申されまじ井伊掃部頭所存ありといへば彼れに任せられよ  
いふ事の返答でありませす依つて伊達家より掃部頭殿へ老  
中其許先達て仔細あるまじと申されたる伊達家の一係定めし深  
き伊所存之れあるべし承はりたしと問はれて直孝此儀某しに  
仰せ付けられるならば首尾能仕隠せすべしと聞て老中方 阿  
部然らば其許然るべき様計ひ將軍家の心ろを安んせられよ  
と井伊殿に托して各々退出せられまじ掃部頭殿は伊城より直  
ちに陸奥守殿の屋敷へ至り忠宗殿へ對面致し度き由を申し入れ

伊達大騒動

ました然るに忠宗此程不快の赴きに付き對面の儀断はり申  
れ申するといふ取次の詞に掃部頭殿 掃部伊達の赴きあつて  
推參仕つる殊に我等は入魂の事なれば決して介意に及ばず  
伊病室まで罷り出でます……と聞て其赴むきを申上げました  
忠然らば通し申せと忠宗殿衣服も改めず懸て井伊殿其所へ着  
座せられまじした 忠病中無禮の段免れと迷いに挨拶畢つて  
四方八方のお話しに移り暫らくして 直孝直孝伊達の赴きと申  
入れましたは余の義にあらす皆々の話しに承まはれば此程老中  
まで貴所より願ひありし由を承はり推參致しましたと聞て  
忠夫は神君より百萬石下賜はるべき伊達家の件であります然る  
に今日までも其御沙汰之れなく依つて願書を差出したので座  
ると云れて直孝其御誓詞は神君の直翰を伊所持であります  
るか 忠元來り伊神判の一紙は所持仕つる伊達に入れんと言つ

伊達大騷動

取出し井伊殿に示した直孝殿假かに手水嗽水不して之  
れを拜見するに紛れなきものあれば直道は慥かに直判に相  
違なし斯る證據あると押戴だきまして直ちにビリ  
は某し頂戴仕しと百萬石は扱て置き二百萬石も進らせ度き思  
ながら直孝昔しは百萬石は扱て置き二百萬石も進らせ度き思  
し召で座つたろが今や惣じて代々の願ひ絶へず甚はた  
つ可きの地がありませうや惣じて代々の願ひ絶へず甚はた  
の心も迷ふと申すは故に此の願ひ絶へず甚はた  
なき事無益の難儀を惹出さんより家の爲を思し召れんこそ  
直孝が盟む所ろでありませうは神文の確乎なる事は早速に上聞  
に達しする貴卿は奥州二十一郡を領せられ知行高六百萬石に  
も及ぶと聞き其上家業へ國富みて何品の欠たる事なし某し  
は無道なる者と申し召しもあらば貴所の存分に隨がひまする

伊達大騷動

.....と否と言は刺違ひをも爲すべき容体なれば忠宗も暫し憫れ  
果ては次々の間に扣へ居りません此忠宗は智勇の方でありませすから  
て彼是す者もありません此忠宗は智勇の方でありませすから  
直孝の心を感じ又其勇氣の勝れたる事を稱美し且つ六十二万  
石の高にて事充分に足りませすゆゑ其理に伏して憤はりを鎮めて  
面を和らげ給ひ直孝殿に對ひ忠貴殿の傍説一々を道理に存  
じます凡そ人慾は限りなきものにて斯る神文あればこそ慾を  
専らに致す足る事を知れば之れ富者なりとは此事なりと聞て直  
孝殿も忠宗の堪忍深き心操を曉り深く歡喜れまして其日は暇を  
告げて立歸られませし依つて伊達家より暇を蒙りましては相成  
りませし乃で明暦四年戊の春忠宗殿の暇を蒙りましては相成  
に成り幾程もなく六月の末より病氣に臥し給ひしゆゑ仙臺の一  
家中一同みあき其傍全快を祈り醫療手を盡しましたが翌五年七月



伊達大騷動

の初旬より病氣ますます危篤にあらせられまして其月の十二日... 大慈院殿義山仁公大居士... 任官せられし忠宗の弟であるに伊達兵部少輔宗勝は仙臺中納言政宗の... 末子にして忠宗の弟であるに伊達兵部少輔宗勝は仙臺中納言政宗の... 侯の列に居らしめん事を願はれまして政宗三万石の知行を分け與へら... れば其願ひ叶はず之れに依つて政宗の城主となされましした政宗... 遊去の後に内分の諸侯となして一關の城主となされましした政宗... 樂頭忠清の娘をもつて兵部の子息市正宗孝へ嫁したる故に忠清

伊達大騷動

と宗勝とは至つて入魂の内縁のあります又久世大和守殿も別し... て懇信の中であります斯く幕府の役人衆に阿諂ひまして其奸... 智高慢の心より自己れ末子たりしをもつて陸奥守にならざる事... を憤ふり居ります事数年忠宗の卒去ありしより此度こそは陸奥... 守に成らんと思つて居りましたが忠宗の嫡子綱宗十八歳にて家... 督を相續せられましたので心に任せず茲に愆心増長して何卒し... て綱宗を押し倒し其家を押領せん事を密かに計り居りました宗... 勝熟々と思ふに宗勝我れ綱宗を倒さんと欲すれども一人の力... をもつては到底も成就し難しが我が爲めの韓信たる者をと考... がへますに當時江戸詰の奉行原田甲斐直則こそ剛勇にして才略... 勝れたる者なるべし彼を一味に抱へ込むを第一とし大望を企だ... てんと先づ甲斐が心を奪はんと其出入りまず度毎に善美を盡... して獲應ししますゆゑ甲斐もその懇懇なるを歡喜び漸次に懇意に

伊達大騒動

成りましました或時茶の湯に甲斐を招ぎました時數寄屋へ案内致し  
ますから直則も歡喜びて其席に通入りますに相伴の客もなく宗  
勝は直則に對ひ宗今日の茶は餘人に勤むる茶にあらす我が胸  
中を洗つて甲斐殿へ進上す……と聞て其意味を曉りましたと  
見へて微笑を洩して原田君が肺肝を洗はれし茶なれば某し腹  
心をもつて茶を喫だきますと聞て宗勝大いに歡喜び近く膝を進  
めて宗今網宗の行跡を見るになかゝ家の政事を執行なはん  
事思ひも寄らす依つて網宗を押し込め幼稚の龜千代を立つて我れ  
後見し密かに龜千代を殺し其後我れ二十一郡を領するに至れば  
貴公望みに任せて領分を褒賞として分け與ふべし此儀許され  
ば某しの満足なりと巧言令色なる此辭に甲斐は素より大膽剛  
愎の性質なれば異儀あく承知して原田君の威勢をもつて内を  
防ぎ某し謀才をもつて外を禦ぎますれば成就せん事業を返すよ

伊達大騒動

りも易く何んぞ愁ふる所ありませうや……と是れより兩人密  
議を凝し密かに奸曲の策を集まして密會をなし其家を倒さん  
と謀り先づ網宗に酒を勤めました然るに其頃赤坂の田町に鳴  
神峰右衛門荒浪棍之助といふ二人りの者元は角力取りで彦座い  
なしたのが今では角力を廢めて博徒となり朝夕賭博を致し吉原の  
遊廓へ入り込みます破落戸でありませうが甲斐は此奴等の事を豫  
て知つて居ります或時兵部に勤めて原田某しが存じ居  
ります鳴神峰右衛門荒浪棍之助の兩人を語らひ網宗殿へ遊廓通  
ひを頼めさせては如何……と聞て兵部开は屈竟の事なり早速  
に其者共を呼び寄する事は相成りますか原田某しが兩人へ書  
面を遣はしまして是れへ招ぎませうと乃で一封の書状をもつて  
即刻拙者宅まで來るべき旨を遣はしました荒浪鳴神の兩人は  
此書状を見て荒浪仙臺の湯家老より呼ばれるには何か旨い話

伊達大騷動

しではないかと言ふは鳴神何でも金になる事だはへ和郎も一  
緒に歩行ねへと直ちに仙臺家の屋敷へ参りますと門番が  
コラ何れへ通る……と谷められ鳴神へ私共は伊當家  
の原田様より召しで座いまして参りましたと聞て門番ア  
左様か原田様から是れより右へ附いて往くと井戸がある其井  
戸の先に黒板塀があつてお名前が出て居る鳴神ハイそれは有  
り難ふ座いますと纏て致へられた通り往きますと直ぐ知れま  
した鳴神お頼み申します……取次何れから……鳴神私し  
共は今日招きによつて参上仕つりました鳴神峰右衛門 荒浪  
私しは荒浪棍之助と申します主人に通じますと甲斐は早速に出で來  
と一室へ案内して斯くと主人に通じますと甲斐は早速に出で來  
つて上座に若座して今日其方共を招きし事餘の儀に  
あらず殿様儀未だは壯年にして病身に在らせらる一家中の

伊達大騷動

者之れを憂ひ種々と病氣保養などお勤め申せども心ろが陰氣  
で入らせられるが病身に於ては國政も遊ばされ難く拙者  
勞致すばかり武家は堅苦しいから此氣分も晴れぬと見へる其方  
等は放蕩を盡したる者ゆへ吉原杯の事は委しく知つて居らふが  
殿様に遊廓に通ひ杯は勤め申したれば褒美も下さる又知行も賜は  
ふが其方等殿様へ参りに入れば褒美も下さる又知行も賜は  
るやうになる其邊は働らき次第だ斯ういふ事を拙者などいふ譯け  
言申上げる職なればなか不埒なる事多し申すといふ譯け  
に参らぬ依つて幸ひなる事がある今度草履取六人召抱へら  
るゝが此六人の中へ其方共を加へんと思ふが當家は新参の者主  
公へ目見は叶はざる伊當家例然るに草履取は中庭掃除の時殿  
様に目見覺へが有る然し草履取りに住込まんとは其方等は思  
ふまいがそれではなければ側へは叶ひ難きゆゑ斯く申すのじや

伊達大騒動

が如何……と言はれて兩人平伏して  
鳴神伊氣遣ひなされま  
るあ及ばすながら私共が受け合ひ  
上げまする荒浪私共  
共は如何なる物堅い方でも辨巧  
をもつて屹度殿様の御意に叶  
ふ様に勤めまするに兩人が承  
陪したるを見て甲斐は歡喜ひ彼  
等に酒など飲まして明日斯様々  
々に致して罷り出でますやうに  
打合せ一先づ歸らせました鳴神  
荒浪伊達家へ住込み綱宗公を  
吉原の遊廓へ通はせましたとい  
ふ奸徒の企だて後席に辨じます

第二席

四五時経まして奸徒の一人渡邊  
金兵衛といふ者綱宗公の御前へ  
罷り出でまして金先頭召抱にな  
りました伊草履取の内に荒浪  
梶之助鳴神峰右衛門と申しま  
する兩人は元町人で伊座います  
が吉原へ通ひ盡して終に身上を  
仕舞ひまして只今に相成ります

伊達大騒動

と眼が覺めましたと申して先づ有附の爲めに伊草履取に住込み  
ましたが此者どもは放蕩致した揚句で吉原の嘶し杯を承はりま  
すると誠に面白くは前にも伊草履の爲に伊座遊ばしては如何  
に伊座いますか誠に恐れ入りましたる儀で伊座りまする……  
と申上げ陸奥守殿に召れ綱宗公は一段の事なり早速に其方  
計らひませへと承たまはつて金兵衛笑みを合みながら伊座を退  
ぞき六人の者ども中庭の伊座除を仕つる様申しましたので直  
ちに彼六人は伊座除を致しました其時金兵衛は金ア、コレ、  
、それで宜しい休足致せ……と言ひ渡しますと彼等は退ぞかん  
と致すを金荒浪鳴神の兩人は伊座前の伊座召しなれば扣へて居れ  
……と言はれて兩人は兼て示し合してありませゆゑは庭に平伏し  
て居りました金兵衛は兩人に對ひ金扱て其方共が吉原の嘶し  
餘り面白ゆゑに伊座前へ吹聴申上げた所ろが伊草履に聞遊

伊達大騒動

ばされたいとの意だが拙者へ嘶したる吉原の事残らず嘶して見よと云はれて兩人長物語りにて此所で残らずに及ばんから事の出来驚まする金ナニ嘶しが出来兼ねる遠慮するに及ばんから遊ばすに遠く又慰みも薄ふ座いますから前近く願ひ奉つりませする……と云ふを聞き召して網コノ金兵衛彼等を是れ通せ……と意がありました乃で兩人を免を蒙むつて傍側へ上りまして峰右衛門は懐中より吉原細見を取出して鳴神是れは至極面白き根本の一卷で座ります……と金兵衛に渡しませた金兵衛は前に差上げさすと見あるに別に面白くもありませんから唯繰返して傍覽になりましたが元より傍存とさき細見なれば何の事やら傍了解りになりぬは容体で座います其時荒浪

伊達大騒動

は進み出て荒浪是は喜見城則はち極樂浄土の人別帳で傍座いまする恐ながら主公にはいまだ極樂を存せしなき事かと存と奉つり升る……聞き給ひて網佛法に極樂といふ事がある何んとしして極樂を予が知るべき謂れなし……と仰せに峰主公には極樂の事を存せしなきも道理然し世俗に極樂遠きにあらす地獄眼前にありと申し升極樂の事十億土の道程を何うして往く事は出来ませんがるれば冥途の傍話し是れは娑婆の極樂と申しますは小唄に柳橋から小船で急がし山谷堀りと弘密の船とは事變り猪牙に家根舟種々に土手入丁死出の山には三途の川衣紋縞ろふ衣紋坂と豊かに大門を通れば忽ち極樂浄土歌舞の菩薩の天津乙女花降りかゝる仲の丁今盛の君たちが夕日眼ばゆき襦袢の四邊り輝やく打扮ちは暫間末社に取巻かれ春宵假千金と巫山の神女に冊かれ莊子が夢のそれならで今面のあたり

ありまするを知らし召れぬは最と惜しく存じますと口から出  
任せに喉舌りまするを聞給ひ綱宗公も與に入り給ひ綱一  
面白からん予も今より往くべしと仰せられて金兵衛に對はれ  
網こりや金兵衛供廻りの準備を申し附けよ……と聞て兩人詞を  
揃ひ兩人是れは君には甚だ心を得違ひかど存じまする極  
樂の儀は娑婆なればとて供觸れ杯仰付られ大勢にては叶ひ  
く假令高位高官の身なり共供は叶はずなれども是れは娑婆  
の極樂なれば我々兩人の供位は苦しからぬ事にては若し  
と聞き給ひて兩人が辨に心助きて我等沙案内を仕まつりす  
備を致すべしとそれより潜かに兩人を召伴れ給ひ吉原の仲の町  
立花屋とヤサ茶屋へ入らせられました仙臺様の参入来といふの  
で俄かに茶屋の女將が女中共を四方へ馳せさせます忽ち女郎

たる義なれば彼が家断絶然るべしと聞て大膳主殿の兩人も甲斐  
が詞に同意して忽ち断絶となりました深べて此度の政事偏頗  
の扱かひある事を知るといへども原田が權威に陥らふ族のみで  
之れを諷むる者もありません心ある者は密かに依怙の事とす  
しますすが之れを黙つて居るといふのは伊達家の政道も今や乱れ  
ました所らなれば之れを諷むる臣なき如き容体で伊達い升……

第三席

茲に伊達家の忠臣に亘三平といふ者が伊達座にましが今度佐藤  
平吉が家名断絶と相成りました事を聞き大いに歎息して諫言を  
入れんと思へど奸臣に妨害せられん事を愁ひまして一封の文を  
呈出致し申しました其文に  
開説く孟子の曰く泰山を脇挾んで北海を越ゆる我れ能はずと

伊達大騒動

ありまするを知りし召れぬは最と惜しく存じまする口から出  
 任せに喉舌りますすを聞給ひ綱宗公も興に入り給ひ綱一  
 面白からん予も今より往くべしと仰せられて金兵衛に對はれ  
 網こりや金兵衛供廻りの準備を申し附けよ……と聞て兩人詞を  
 揃ひ兩人是れは君には甚だ心を得違ひかど存じまする極  
 樂の儀は娑婆なればとて供觸れ杯仰付られ大勢にては叶ひ  
 く假令高位高官の身なり共此供は叶はずなれども是れは娑婆  
 の極樂なれば我々兩人の位は苦しからぬ事にてはへば若し  
 滲みながら滲出に相成りますれば我等滲染内を仕まつりす  
 と聞き給ひて兩人が辨に滲心る動きて網然らば兩人どもの  
 備を致すべしとそれより潜かに兩人を召伴れ給ひ吉原の町の  
 立花屋とヤす茶屋へ入らせられました仙臺様の滲入來といふの  
 で俄かに茶屋の女將が女中共を四方へ馳せさせます忽ち女郎

欠

MISSING



伊達大騷動

第三席

たる義なれば彼が家断絶然るべしと聞て大膳主殿の兩人も甲斐が詞に同意して忽ち断絶となりました潭べて此度の政事偏頗の扱かひある事を知るといへども原田が權威に諮らふ族のみで之れを諷むる者もありません心ある者は密かに依怙の事とすしまた所ろなれば之れを厭つて居るといふのは伊達家の政道も今や乱れました所ろなれば之れを諷むる臣なき如き容体で伊座い升……

茲に伊達家の忠臣に亘三平といふ者が伊座いましたが今度佐藤平吉が家名断絶と相成りました事を聞き大いに歎息して諫言を入れんと思へど奸臣に妨害せられん事を愁ひまして一封の文を呈出致しました其文に  
開説く孟子の曰く泰山を崩壊んで北海を越ゆる我れ能はずと

伊達大騒動

是れ能はざるなり長者の爲に枝を折る我れ能はず是れ能はざるにあらす後世斯くの如きか此度の傍政道こそ僻言の様  
存じしへば渠は譜代の士是れは漸恩無智の職なり譬へば長者  
の爲に枝を折にひとし泰山の重きを捨て長者の輕きを取給ふ  
事何ぞや或人の曰く盛の如く家士を思ふの主人は亡ふといふ  
いかんとなれば盛は漸敗をもつて吉とす其家士も新しきをも  
つて好むる時は舊恩の者うらむ恨る時は其家調はざるなり諫  
士あれば罰せられ佞士は稱美せらるゆゑに智ある者は隠れ義  
ある者は退く然れども愚臣は伊達の家に譜代として然も其  
祿を食へり故に其主を賣て其身を高くする事誠とに我中の虫  
の如く思へり早く握之助が首をさり平吉が家を立て甲斐が職  
を劍で余人に代らしめん事を願ふ近臣の内此旨を披露あらば  
生前の本懐ならん云々

伊達大騒動

綱宗公は覽あつて甲斐を召れまして是れを見せ給ふ甲斐是れを  
見て心中大いに驚ろき且つ怒り甲斐某し荷くも君の祿を食ひ  
大職にあれば寸忠を盡さん事を欲し寢食を安んずる事なし然れ  
ども斯の如き誹謗の文を見る事は臣が罪に之れあります何卒  
仙臺表より然るべき人を選んで呼登せ給ひ某しが職に替らせ給  
へ某しは山林に退ぞき清風残月を翫ふに如すと存じ奉つり升る  
と涙を流して述べました綱宗公打笑ひ給ひ綱此書を汝に見  
せたる事汝しが罪を責るにあらす之れ亘が罪を糾さんか爲めな  
り宜敷之れを計らふべし……とすされませすを原田は答へるやう  
原田彼れ某しが罪を糾さんとするに何とて是れに與かるの儀  
はんや兵部殿こそ宜きは相談相手にいはんものを……と其儘退  
出致し翌日より病氣の趣ひきを届け閉門の如くに致して引籠つ  
て居りました乃で綱宗公は直ちに兵部少輔を召れて此事を議せ

伊達大騷動

られましした兵部少輔之れを承はり兵部寵愛他に異なる臣おれ  
ば傍輩之れを妬み訴ふる事止ざるものなり彼れ三平下として上  
を計るの罪之れより大いなるはなし早々渠が縛り首を刎て下よ  
く上を訴ふる事を断れ重ねて嫉妬がまじき言を費やすもの見  
憐らしになし給へ……と聞て綱宗公之れに同意せられ仍つて品  
川の補給が崎の下屋敷に於て亘三平を斬罪に所せられました兵部  
少輔は退出がけ甲斐が宅へ立寄りまして此の裁判の事を如此々  
々と告げ異つて後ち人を捕つて驛を低めて兵部我れ熟々考が  
ふるに綱宗毎夜遊廓へ通ふこそ屈辱の時なり彼荒浪鳴神等は元  
來我々が荷擔人なり依つて渠等に付けて密かに道路にて差殺  
させ知らぬ顔にて其死骸を屋敷へ取入れて病死の趣むきに撰  
し置けば宜しかるべし此儀は奈何……と聞て原田开は容易き  
事なり此事猶豫するに及ばず彼兩人を呼寄せて相談せらるべし

伊達大騷動

と答へに早速兩人方へ密かに使を遣はしました折悪敷荒浪棍  
之助は綱宗公の傍側に詰居りましたゆへ鳴神峰右衛門一人直ち  
に参りました兵部は右の概略を語り聞せました然るに峯右衛門  
心中に思ふ様鳴神此奴ア大變な事を言ふ我れ下賤の者なれど  
も今大國の諸侯の側近く召仕はるゝのみならず其寵愛も他人  
に越へたれば皆な我れを羨やみ思ふ位ひなり之れは主君の傍  
恩なるに何んぞや情けあくもその大恩の君を弑して未代まで名  
を汚す事をなさんや……と胸に問ひ腹に答へて然あらぬ体  
鳴神傍意の趣むき長まりいへども綱宗公傍横死の傍沙汰之れあ  
れば伊達の傍家滅亡仕つらん然すれば多年の心勞も水泡に歸  
せんかど存じまする道は外には置慮廻らされ然るべう存じます  
るも聞て原田も暫し伺も出さず其時兵部笑つて兵部开は少し  
も氣遣ひなし我れ幸はひ雅樂頭と懸念なれば公邊を繕るひ伊達

伊達大騒動

家に別條なき様、斗らふは我が方寸の裏にありと聞て、甲斐は兵部  
に對ひ、原田をれば君の傍誤まりと存じ、まする奈何んとなれば  
酒井殿こそ、入魂に在し、いとも元老の内、智者もあり、決して其理  
に暗き事あるべからず、ゆゑに某しは豫て君の仰せに隨がひ、既に  
綱宗の行跡を亂させ、たれば違からず、品川の下屋敷へ押籠め、とな  
さん事を計り、置き、い然るを筋なき事を企てられ、却つて禍ひを招  
ぐより、は某しに任せ、あるべし……と聞て、兵部も道理に思ひ、是  
れに同意して、刺殺の謀計は止め、ました、茲に原田甲斐と、同役を勤  
め、まして、食祿四千石を領する、奥野山大學といふ者、此頃、甲斐と兵  
部の行跡を見、まするに、政道渾て、最負の沙汰のみ、多く、其上、彼等が  
奸佞の企て、ある事を、曉つて、深く、歎息して、頻りに、此事を、愁ひ、大  
學所詮、今君へ、諫言し、奉つるといへども、用ひなき事は、必定なり、  
然らば、四郎左衛門三平、杯が、成行と、同じくして、誠とに、淺間、賊事な

伊達大騒動

り、我れ病氣と偽はり、國許へ引籠み、伊達安藝片倉小十郎等に、此事  
を告げ、主家の一大事を計らば、んと決心致して、變て、翌日より、眼病  
と言、立て、出仕も致しません、から、原田甲斐は、訝かり、つゝ、思ふに、  
原田渠れが、出仕なきは、其意を得ず、萬一、我々が、企てを、知り、偽はつ  
て、引籠み、居るやも、謀り、難し、と疑が、ひ、まして、渡邊金兵衛を、招き、  
原田、足下、大學が、病氣の、眞偽を、探り、て、來るべし……と、命せられ、ま  
した、ので、金兵衛は、早速に、大學方へ、參つて、案内を、乞ひ、ますと、奥へ  
通され、金貴所には、病氣の、由如何に、傳座り、ますか……と、問は  
れて、大學は、大學イヤ、渡邊氏某しは、奈何なる、過去の、業因なるか  
ソコヒに、なり、ました、ので、何も、見へ、ませんと、聞て、金兵衛も、大學の  
顔を見、お、が、ら、種々の、顔色を、して、見せ、ます、けれど、も、少しも、感じ、が  
なき、容体、殊に、手元にある、烟管、又は、茶碗、杯を、取るにも、頻りに、其所  
等を、撫廻して、取るの、を見、まして、金兵衛も、眞事と思ひ、金、それは

伊達大騒動

嘸<sup>も</sup>予<sup>も</sup>不<sup>も</sup>自<sup>も</sup>由<sup>も</sup>で<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>座<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>う<sup>も</sup>折<sup>も</sup>角<sup>も</sup>保<sup>も</sup>養<sup>も</sup>な<sup>も</sup>さ<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>せ<sup>も</sup> 大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>に<sup>も</sup>深<sup>も</sup>切<sup>も</sup>忝<sup>も</sup>  
し<sup>も</sup>け<sup>も</sup>な<sup>も</sup>し<sup>も</sup>去<sup>も</sup>り<sup>も</sup>な<sup>も</sup>が<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>此<sup>も</sup>の<sup>も</sup>眼<sup>も</sup>病<sup>も</sup>は<sup>も</sup>今<sup>も</sup>俄<sup>も</sup>か<sup>も</sup>に<sup>も</sup>發<sup>も</sup>り<sup>も</sup>た<sup>も</sup>で<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>ん  
昨<sup>も</sup>年<sup>も</sup>か<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>少<sup>も</sup>し<sup>も</sup>物<sup>も</sup>を<sup>も</sup>見<sup>も</sup>る<sup>も</sup>に<sup>も</sup>霞<sup>も</sup>み<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>が<sup>も</sup>此<sup>も</sup>頃<sup>も</sup>全<sup>も</sup>て<sup>も</sup>見<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>ぬ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>で  
金<sup>も</sup>成<sup>も</sup>程<sup>も</sup>マ<sup>も</sup>ア<sup>も</sup>と<sup>も</sup>告<sup>も</sup>げ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>這<sup>も</sup>は<sup>も</sup>元<sup>も</sup>よ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>忠<sup>も</sup>臣<sup>も</sup>無<sup>も</sup>二<sup>も</sup>の<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>彼<sup>も</sup>の<sup>も</sup>金<sup>も</sup>兵<sup>も</sup>衛  
に<sup>も</sup>斯<sup>も</sup>く<sup>も</sup>と<sup>も</sup>告<sup>も</sup>げ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>這<sup>も</sup>は<sup>も</sup>元<sup>も</sup>よ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>忠<sup>も</sup>臣<sup>も</sup>無<sup>も</sup>二<sup>も</sup>の<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>彼<sup>も</sup>の<sup>も</sup>金<sup>も</sup>兵<sup>も</sup>衛  
等<sup>も</sup>に<sup>も</sup>虛<sup>も</sup>病<sup>も</sup>を<sup>も</sup>見<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>る<sup>も</sup>様<sup>も</sup>な<sup>も</sup>事<sup>も</sup>は<sup>も</sup>あ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>ん<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>は<sup>も</sup>少<sup>も</sup>し<sup>も</sup>く<sup>も</sup>安<sup>も</sup>心<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>と  
は<sup>も</sup>い<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>も<sup>も</sup>心<sup>も</sup>許<sup>も</sup>な<sup>も</sup>く<sup>も</sup>思<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>て<sup>も</sup>居<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>と<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>は<sup>も</sup>杖<sup>も</sup>を<sup>も</sup>便<sup>も</sup>り<sup>も</sup>に<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>が  
宅<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>參<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>も<sup>も</sup>幸<sup>も</sup>は<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>彼<sup>も</sup>が<sup>も</sup>ソ<sup>も</sup>コ<sup>も</sup>ヒ<sup>も</sup>を<sup>も</sup>見<sup>も</sup>窮<sup>も</sup>め<sup>も</sup>吳<sup>も</sup>ん<sup>も</sup>と<sup>も</sup>對<sup>も</sup>面<sup>も</sup>し  
て<sup>も</sup>原<sup>も</sup>田<sup>も</sup>コ<sup>も</sup>レ<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>殿<sup>も</sup>能<sup>も</sup>ふ<sup>も</sup>こ<sup>も</sup>そ<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>入<sup>も</sup>來<sup>も</sup>此<sup>も</sup>方<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>……と<sup>も</sup>言<sup>も</sup>は<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>て<sup>も</sup>大  
學<sup>も</sup>は<sup>も</sup>探<sup>も</sup>り<sup>も</sup>な<sup>も</sup>が<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>膝<sup>も</sup>を<sup>も</sup>進<sup>も</sup>め<sup>も</sup>て<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>拙<sup>も</sup>者<sup>も</sup>儀<sup>も</sup>只<sup>も</sup>今<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>で<sup>も</sup>君<sup>も</sup>の<sup>も</sup>側<sup>も</sup>に<sup>も</sup>勤  
仕<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>存<sup>も</sup>じ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>通<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ソ<sup>も</sup>コ<sup>も</sup>ヒ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>患<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>に<sup>も</sup>て<sup>も</sup>用<sup>も</sup>も<sup>も</sup>相<sup>も</sup>勤<sup>も</sup>め<sup>も</sup>兼<sup>も</sup>ま  
す<sup>も</sup>ゆ<sup>も</sup>え<sup>も</sup>何<sup>も</sup>卒<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>暇<sup>も</sup>を<sup>も</sup>願<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>國<sup>も</sup>許<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>引<sup>も</sup>籠<sup>も</sup>り<sup>も</sup>塾<sup>も</sup>居<sup>も</sup>の<sup>も</sup>身<sup>も</sup>と<sup>も</sup>相<sup>も</sup>成<sup>も</sup>り<sup>も</sup>た<sup>も</sup>く<sup>も</sup>夫<sup>も</sup>に<sup>も</sup>  
付<sup>も</sup>き<sup>も</sup>俸<sup>も</sup>與<sup>も</sup>三<sup>も</sup>郎<sup>も</sup>儀<sup>も</sup>貴<sup>も</sup>殿<sup>も</sup>の<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>引<sup>も</sup>廻<sup>も</sup>し<sup>も</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>て<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>前<sup>も</sup>休<sup>も</sup>宜<sup>も</sup>敷<sup>も</sup>は<sup>も</sup>披<sup>も</sup>露<sup>も</sup>な<sup>も</sup>し

伊達大騒動

下<sup>も</sup>さ<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>た<sup>も</sup>く<sup>も</sup>願<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>上<sup>も</sup>げ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>……と<sup>も</sup>聞<sup>も</sup>て<sup>も</sup>原<sup>も</sup>田<sup>も</sup>夫<sup>も</sup>は<sup>も</sup>氣<sup>も</sup>の<sup>も</sup>毒<sup>も</sup>千<sup>も</sup>万<sup>も</sup>  
なる<sup>も</sup>次<sup>も</sup>第<sup>も</sup>併<sup>も</sup>し<sup>も</sup>な<sup>も</sup>が<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>今<sup>も</sup>一<sup>も</sup>度<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>療<sup>も</sup>養<sup>も</sup>を<sup>も</sup>換<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>能<sup>も</sup>々<sup>も</sup>養<sup>も</sup>生<sup>も</sup>致<sup>も</sup>さ<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>た<sup>も</sup>く<sup>も</sup>涉  
前<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>は<sup>も</sup>某<sup>も</sup>し<sup>も</sup>宜<sup>も</sup>敷<sup>も</sup>披<sup>も</sup>露<sup>も</sup>を<sup>も</sup>送<sup>も</sup>げ<sup>も</sup>は<sup>も</sup>暇<sup>も</sup>を<sup>も</sup>給<sup>も</sup>は<sup>も</sup>る<sup>も</sup>様<sup>も</sup>致<sup>も</sup>し<sup>も</sup>進<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>す<sup>も</sup>べ<sup>も</sup>し<sup>も</sup>と<sup>も</sup>聞  
て<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>も<sup>も</sup>歡<sup>も</sup>喜<sup>も</sup>ん<sup>も</sup>で<sup>も</sup>歸<sup>も</sup>宅<sup>も</sup>致<sup>も</sup>し<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>は<sup>も</sup>前<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>罷<sup>も</sup>り<sup>も</sup>出<sup>も</sup>て<sup>も</sup>原<sup>も</sup>田<sup>も</sup>  
先<sup>も</sup>達<sup>も</sup>て<sup>も</sup>中<sup>も</sup>より<sup>も</sup>奥<sup>も</sup>野<sup>も</sup>山<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>儀<sup>も</sup>ソ<sup>も</sup>コ<sup>も</sup>ヒ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>患<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>に<sup>も</sup>て<sup>も</sup>用<sup>も</sup>勤<sup>も</sup>め<sup>も</sup>難<sup>も</sup>く<sup>も</sup>い<sup>も</sup>に  
付<sup>も</sup>き<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>暇<sup>も</sup>を<sup>も</sup>願<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>出<sup>も</sup>て<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>て<sup>も</sup>涉<sup>も</sup>座<sup>も</sup>り<sup>も</sup>立<sup>も</sup>す<sup>も</sup>と<sup>も</sup>言<sup>も</sup>上<sup>も</sup>に<sup>も</sup>及<sup>も</sup>び<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>網  
宗<sup>も</sup>公<sup>も</sup>儀<sup>も</sup>聞<sup>も</sup>き<sup>も</sup>遊<sup>も</sup>ば<sup>も</sup>し<sup>も</sup>網<sup>も</sup>其<sup>も</sup>は<sup>も</sup>不<sup>も</sup>惑<sup>も</sup>の<sup>も</sup>至<sup>も</sup>り<sup>も</sup>渠<sup>も</sup>が<sup>も</sup>願<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>に<sup>も</sup>任<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>よ<sup>も</sup>……と<sup>も</sup>  
殊<sup>も</sup>の<sup>も</sup>外<sup>も</sup>憐<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>み<sup>も</sup>給<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>し<sup>も</sup>仰<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>で<sup>も</sup>あ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>は<sup>も</sup>早<sup>も</sup>速<sup>も</sup>に<sup>も</sup>右<sup>も</sup>の<sup>も</sup>趣<sup>も</sup>む<sup>も</sup>き  
大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>方<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>使<sup>も</sup>者<sup>も</sup>を<sup>も</sup>遣<sup>も</sup>は<sup>も</sup>し<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>は<sup>も</sup>打<sup>も</sup>敷<sup>も</sup>喜<sup>も</sup>び<sup>も</sup>馳<sup>も</sup>て<sup>も</sup>は<sup>も</sup>暇<sup>も</sup>乞<sup>も</sup>ひ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>し  
て<sup>も</sup>今<sup>も</sup>日<sup>も</sup>は<sup>も</sup>前<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>罷<sup>も</sup>り<sup>も</sup>出<sup>も</sup>て<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>と<sup>も</sup>甲<sup>も</sup>斐<sup>も</sup>は<sup>も</sup>猶<sup>も</sup>も<sup>も</sup>實<sup>も</sup>否<sup>も</sup>を<sup>も</sup>訊<sup>も</sup>し<sup>も</sup>見<sup>も</sup>ん<sup>も</sup>と<sup>も</sup>密<sup>も</sup>か  
に<sup>も</sup>金<sup>も</sup>兵<sup>も</sup>衛<sup>も</sup>に<sup>も</sup>附<sup>も</sup>け<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>に<sup>も</sup>如<sup>も</sup>此<sup>も</sup>々<sup>も</sup>々<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>よ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>私<sup>も</sup>語<sup>も</sup>き<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>し<sup>も</sup>た<sup>も</sup>金<sup>も</sup>兵<sup>も</sup>衛<sup>も</sup>は  
心<sup>も</sup>得<sup>も</sup>て<sup>も</sup>大<sup>も</sup>學<sup>も</sup>が<sup>も</sup>探<sup>も</sup>り<sup>も</sup>足<sup>も</sup>し<sup>も</sup>な<sup>も</sup>が<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>書<sup>も</sup>院<sup>も</sup>の<sup>も</sup>方<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>往<sup>も</sup>き<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>先<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>廻<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>て<sup>も</sup>自  
及<sup>も</sup>を<sup>も</sup>抜<sup>も</sup>て<sup>も</sup>目<sup>も</sup>先<sup>も</sup>へ<sup>も</sup>閃<sup>も</sup>め<sup>も</sup>か<sup>も</sup>し<sup>も</sup>て<sup>も</sup>見<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>す<sup>も</sup>け<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>驚<sup>も</sup>ろ<sup>も</sup>く<sup>も</sup>氣<sup>も</sup>色<sup>も</sup>も<sup>も</sup>な<sup>も</sup>く<sup>も</sup>又<sup>も</sup>

伊達大騷動

次の間にても同じく目先へ遮ぎらせましたけれども目たさきも  
致さず前へ出でました綱宗公お聲をかけた給ひ綱其方眼病ゆ  
へ暇を乞ふ事止むを得ず依つて今日より勝手次第に發足致すべ  
し……と宜へば大學順首して大學拙者奈何なる業因にいや  
コヒの煩らひ相發し圖らずも度君の尊顔を拜し奉つり度存じ  
は甚だ残念の至りに今一度君の尊顔を拜し奉つり度存じ  
へども夫さへ叶はず斯る業病某しが心のうち憐察なし下され  
たし……と涙をハツと流しました綱宗公も不便に思し召れ  
まして國安の短刀を懐手づから下し賜はり前の首尾宜しく退  
出致しました切て大學は我が家へ歸り早速に家財を取片付け準  
備を致しまして三日間に旅の支度も調ひ癒て出立致した  
急て千住の驛路もいつしか過ぎて大學は若黨を呼び大學コレ  
其給は跡になり過る又草履取りは奈何した何跡の驛に後れ

伊達大騷動

た不都合な奴じやと諸事を下知致します容体少しも眼病の体な  
く能く目が屈きますゆゑ若黨は驚ろいて若黨旦那様の眼病と  
仰せ立ちられしは何か妙所存があつての事だ皆な氣を附けないと  
叱られる予と私語き合ひました急て八十餘里の道を日數僅かに  
四日半ばかりにて脇屋の城へ到着致しました伊達安藝宗重とサ  
されすは父を定宗と喚び伊達家外戚の家柄にして忠義廉直の  
君子にして殊に才智勝れました勇士で座います此安藝が妹婿  
に白川主殿といふ者があります彼は綱宗公の側近く召仕は  
れたるものなれば或時主殿を招き密かに申しますには安藝我  
れ豫て聞つるには主君綱宗公は涉部屋住の時武藝を嗜なみは  
學問に涉心を委ねて徳を修められしゆゑ諸人も之れを歡喜  
安堵の思ひをなせしといへり然るに家督相濟ての後大酒嬉樂  
をなし給ふ事甚だしく且つ涉不行跡にて不仁の行狀少な

らす斯く淺ましき舉動あつては奈何成行くや伊家の爲め深く  
之れを怒ふて聞に忍びざるなり其方は能く其事を知り居るべし  
承はりたし………と聞て主殿仰せの如く今遠山勘解由渡邊金兵  
衛杯の位人共日夜伊側を離れず佳肴美酒を勸め乱舞遊興のみを  
勤め進らせ只管に主君の伊心を奪ひ或ひは遊里に誘ひ進らせ  
居りますと聞て安藝古語にも君恥かしめらるゝ時は臣死すと  
かや其方此側に侍りながら何ゆゑ諫言を入れ奉つらざるや君をし  
てます、不善に陥し入れ給ふにや宜く諫言を奉つり君此用ひ  
なき時は折を見合せ三度までは諫め奉つるを臣の忠といふ又三  
度目にも此用ひなくば祿を辭して退きいとも比干に倣ふて胸  
を裂るゝとてても必らず歎く事なかれ義に死する人は翹なくして  
其名は未代に飛行す不禮のなき様に詞を正し忠臣の道を致さる

べしと事細やかに教訓する事を聞き主殿は感し入りまして主  
殿道は潔ぎよき貴所の詞義を見てせざるは勇なしとかや某し必  
らず義に死すべし伊心易く思し召れよ然らば某しが妻子の事  
何分宜しく頼みまする安藝丹は伊心配に及ばずと茲に受合ひ  
ましたゆゑ主殿は今心る安しと雖も江戸表へ出勤致し忠義を  
盡したした切て綱宗公の伊行跡を見るに忍びざれば伊機嫌を伺  
がひ其機会を窺がひ居りましたが必竟白川主殿諫言に及ぶの一  
條より此手討に相成るのお話し後席に辨じます………

第四席

白川主殿は主君の伊行跡悪しき事です、盛んなれば主殿も力  
盡き奈何んども施こすべき様なし若し此上強て諫め奉つれば定  
めし我を誅せらるべし主君の爲に捨る命は武門の望む所ろなれ

伊達大騒動

とよも仕出したる事もなく却つて主君の不行跡を世の人に披露す  
るに似たり去りて今諫めざれば伊達家の滅亡も面のあたりな  
り之れ臣たるの道を失ふなり死する命は惜しからず然し伊達  
綱宗公は狂乱して家來を數多手討にした杯と評判されなば是れ  
も不忠ありいづれにしても其罪通れ難しと柴田外記に密かに語  
り居ります折から綱宗公吉原より歸館に相成りました然るに  
或日此登城日では座いますゆゑ酒宴を開かれました白川主殿は  
相待ち居りますに其儀なく又酒宴を開かれました白川主殿は  
此前へ出でまして恭々しく座して頭を下げ一言も發せず半時は  
かり扣へて居りましたスルト渡邊金兵衛は金コレ貴殿は召  
もなきに何ゆゑ久しく修前に詰り居らるゝ無禮千万なりと聞く  
より主殿はたまり兼ねまして主殿コレ金兵衛の威を借る狐  
とは戦國策に出たるがゆゑ古き事と思ひしに其許の事ならん武

伊達大騒動

道を踏はせも知らず主君を不義の陥し穴に落し進らせ我々を見  
れば仇敵の如く會釋い主君の悪事を後代まで殘さん事は皆な奸  
佞なる足下等の致す所なり斯くすのを奇怪に思ふならば勝  
手次第に致されよ……と言ひつゝ主君へ對つて主殿恐れなが  
らや上げますが當日は祝儀として我君には登城遊ばれは  
んかど存じ奉つるに道は失念の儀にいや同がひ奉つります  
る聞れて綱宗公は少し怒りの面色を現はし綱宗は物忘れし  
たる事なし何ゆゑ斯様な事をすす以後能く嗜み居れ……と仰  
せに主殿は額を疊へ摺り附けまして主殿臣等祝儀や上は事  
修失念遊ばされずは何ゆゑ今日將軍家へ修祝儀の修遊城を修延  
引遊ばされぬやらん抑も當家は代々將軍家に前に於ては元  
服悉くけなくも修諱の一字を下し賜ふ賤しき下々にても名を貫  
ひまする人に對して式日の勤めは致しませざる之れ日本の國風で



伊達大騒動

ありまする主君には、若年の昔より四書五經を友とし給ひし、  
身なれば我々如き文旨の上るに及ばざる儀と存じ奉つりゆゑ  
恐れながら右儀伺がひ上げまする主君論語に君子の徳は風な  
り小人の徳は草なりと侈座ります君は六十二万石の主人上を見  
習ふ下なれば大切の身あり簡様に物毎成り行きましては、家  
の法度立ち難く國風の棄れるこそ心憂き限りになんじます今君  
は色と酒とに迷はせ給ふゆゑ公儀の心勤めも侈怠慢になり民を  
撫育し給ふの道も廢る實に忠言は耳に逆らひ良薬は口に苦く思  
し召して金兵衛杯の倭人を愛し給ふ小人の交りは甘酒の如しと  
は渠等の類ひなるべし斯く上るとて我々を慢するにあらず唯  
歎かばしきは先づ政宗公の忠良も徒事になり、家の斷絶近  
からんかと存じ奉つりますと……と道理を盡して諫めながら涙  
を流して平伏致しました綱宗公は兎角の傍詞もなく在しますを

伊達大騒動

主殿は又主殿兎角の家安全の傍めと存じ恐れながら右の  
通り上げゆ……と立んとする所を伺とも掛け給はず左文字  
の短刀振打に發矢と祈つた主殿が首忽ち前には落ました金兵  
衛勘解由顔見合せ茫然として扣へて居りました綱宗公心地よげ  
に大盃を舉げ給ふ噫無慘……天晴れなる忠臣で座います然れ  
ど此主殿が事は折々綱宗公は網白川主殿こそ武勇の者なり不  
便の事をしたと仰せられました怒る容体なれば綱宗公は相替ら  
す吉原へ夜毎に運びにあります其敵娼は其頃三浦屋方に全盛  
を極めました高尾で侈座います彼れが飽麗なる姿に綱宗公は現  
つゝを抜して馴染を重ね給ひ繁々通はせられましたが此高尾に  
は島田重三郎といふ二世も三世も替らじと誓ひました情人があ  
りますから仙台様がいくら口説き給へども遂に下細を解きませ  
ん綱宗公は斯る間夫がある事などは存じはありませんから或

伊達大騒動

時高尾に對つて 綱手は未だ眞の遊びをなさず斯くまで心を盡し通ふといへども其方は最とつれなき款待しこそ恨みなり凡そ梢に鳴く蟬も野にあさる雉子まで情けはあるに色を表として情けを賣る身に於て斯くまで懇煩ふ手を憚まし呉る心こそ聞へぬ予情けの道に隔てのあるや聞まはし……と宣へば 高尾されば君は大身の方自からは戯れ女にして引手餘多の身の上なれば唯たはふれ給ふを知りはべる然し君の眞心を見届け進らせざる内は心ろには隨がひ兼ねます……と言れ綱宗公 綱よしさらば請出してこそ賊とを見せん……と聞て高尾は打微笑み高尾妾はが心ろに眞實に思ふ事のなき内は假令此身を受出し給ふどもさして替りし所ろもはべるまじ奈何なるゆゑにか君に肌ふる事はふつゝ嫌にてはべる……と振られましたか昔の花魁は大した見識があります仙臺様を振つてゝ振り抜く振とは

伊達大騒動

此道の操と後世せで稱せられませんが何うも力づくにもなりませんもので傍座いまず然れど綱宗公は早速に高尾を受出さんと此事を三浦屋の主人に談じすべしといふので高尾は大いに愁ひまして其事由を委しく鮎書に認ためまして情夫島田重三郎方へ申し遣はしました島田重三郎は高尾のみを見て大いに驚き重扱て困つた到底も力らに及ばない然し傾城に眞實なしといへども彼れが如き貞節を盡すこと實に殊勝な心底なりと種々に工夫を廻らしましたモシ是を捨て置けば他人の眺めになるのみならず彼れも生きて居る所存は有るまじ然ある時は我れとて生ながらへても何を樂しみとあさん今さら戀の奴隷となりまして歎き居りました何が思案を致して居ります所へ浮世渡平といふ破落戸の頭にて可成りの顔でありますが重三郎は豫て男色の因縁がありますから懸念にして互ひに往來して居りましたが或

伊達大騒動

日島田方へ来て重三郎の顔を見て怪しみながら 渡和郎さん何  
うかしたのか……と問はれて重三郎は 主イヤ餘の儀でもない  
が足下も知つて居る吉原の高尾が今度如斯々なりそれゆゑ深  
く思案に沈み居りました 渡男たる者わが思ふ念力を徹さぬと  
いふは残念なり小舟に任任せなさい彼人廊通ひの途中に待受け  
運に任せてやつ附けて仕舞ひませうと聞て重三郎も一儀に及ば  
ず蒲面に歡喜の色を現はし 重若し然うして下されば忝とけ  
ないが 渡和郎さんと小舟の中だ心配にやア及ばねへ……と言  
はれて重三郎も秘蔵の仁王國清の二尺八寸の一刀を取出して  
重何卒首尾よく本意を遂げて呉れますやうと云れて渡平は彼の  
事に心配するに及ばずと此一刀を帯し密かに綱宗公を狙ひ居り  
ました此方は綱宗公高尾が辭に今更思ひ断れず彼が面影目先に  
チラ附くやうに思し召れ心を苦しめ給ひしがいよゝ 辭け出す

伊達大騒動

事に決心致されて近士の中にて今泉文右衛門といふ小姓頭を勤  
め居ります者に身附の金を調達致すべしと言附られ文右衛門は  
急いで甲斐の宅へ参り 文主君には吉原の高尾身受けの金子……  
を仰せられますが此謀めなすつては如何で御座いますと聞て  
原田若き主公の一度や二度は左様の事もあるべし追々年輪で  
も取らなれば自然と合點も行くものにて身も正敷なり  
給ふならん又金子の事は渡邊金兵衛方にて受取りやされよとい  
ふ挨拶なれば今泉は惘れて 文原田氏まで懸着しないわい……  
と胸に思ひながら金子を受取りまして鳴神荒浪の兩人を驚しま  
した綱宗公も機嫌よく其夜又吉原へ越しになりまして例の立  
花屋方へ入らせられままた供は例の鳴神荒浪の兩人を召連れ  
られまして高尾を招ぎますに彼れ病氣と稱えて出来らず面白  
らぬ酒宴なるゆへ機嫌も悪しく帰りになりませすので怒籠

伊達大騒動

に乘つて例の通り町よりお歩行にて日本橋筋をさして来掛り給ふに雨降り揚句で往來は水溜りがあつて泥濘で居りまして一方に人の踏固められた細道が一筋付て居りますを主従今此所を歩行みて往んとする前面より大の男三人ばかり突然り綱宗公へきたか泥を蹴かけました綱宗公元來短氣の大將で侈座いますから大いに怒り綱宗公は斯く無禮を致す尤ども一筋の道なれば此方も遊を開いて行くに能く斯くなせしこを不届き奴め……と宣まへば彼等は呵々と笑つて男斯んな暗らい夜道なれば道が見へねへ況してや汝が身体も目に這入らねへのぞ此馬鹿野郎め……と聞よりいよ……堪へ兼ね給ひ綱道は推参なる難言其儀ならば此世の暇取らせて呉れんと言ふより早く扱打に所付け給へば彼れは飛退つて男小癪な腕立我を誰とか思ふ名乗つて聞そふ……と尻引からげ一層膝を高くして

伊達大騒動

睡りの夢と見なした浮世渡平とは他の事だイデ日來の手練を見せて呉んど彼國清の一刀を眞向に振冠つて所かけました彼れ等の一人半次といふ者は荒浪に漕り合ひ今一人の楯兵衛は鳴神に無手と組付きました組れたる鳴神は元來角力上りですから少も恐れず楯兵衛も力量あるものなれば双方劣らず揉合ます内傍はらの泥の中へ組んだる儘落入つて暫し捻ぢ合ましたが遂に鳴神は楯兵衛を捕つて押へ咽首に手を掛けエイと一撃締め付けましたので流石の楯兵衛色青ざめて息絶へました又荒浪と半次は逆さまに倒れます所ろを荒浪走り寄りまして破落離すんど大袈裟に打放しました綱宗公は飛鳥の如く秘術を盡し給へども血氣盛んの渡平茲を専途と切込みますので君も受太刀と成り給ひ既に危ふく見へたる所ろへ荒浪駆来つて用意に持つたる鐵の仕込杖を

伊達大騒動

もつて渡平が右手より腕をした、かに撲り付けられ刀を取落す  
所ろを鳴神衝つと寄つて引組みました元來渡平が力強く物ども  
せず鳴神を小脇に挟んで動かさず荒浪透さす彼れが唇を掴ん  
で捻倒さんと揉合ひました綱宗公は渡平が胸元を望んで刺し徹  
し給へば洗石の渡平も只渡無念々々と斗りにて倒れます奴を  
水も溜らす首を打落し人の来らぬ其間に主従三人其場を立退  
き給ひしは誠とに危き有様で伊座いたしましたそれより主従三人は  
道を急ぎて中橋まで来られますと既に五更を過ぎました頃であ  
りまえた綱宗公兩人に對ひ綱コレ此邊に知る人はなきか湯な  
り水なり求め洗足致さんと宣まひましたので鳴神は彼此を窺  
がひましたがいづれも未だ起出た容体もありませんが彼所に一  
軒戸を開けます家があまりますから近寄つて見るに豆腐屋でありま  
す鳴神は立寄つて鳴神コレ水なり湯なり所望したいがど

伊達大騒動

いふを亭主は見ると大の男あるゆゑ大いに驚るき夜盗の類ひな  
らんと慥々として物も言得ず鳴神其方何も恐るゝものではない  
身共が主人に湯を一ツ進らせんと思ふゆゑ頼むのである亭主は  
聞て熱々容体を見るに之れ平人でありませんから亭主長まり  
ました先づ此方へ伊這入りあさいませと俄かに女房を起し最と  
信實に酬らいて湯を御膳し汚れたるを洗はせ杯致しました綱宗  
公は歡喜ばせ給ひ綱渠めは心ろの利たる者なり當座の寝美に  
それと仰せられましたゆゑ泥だらけなる木屐を取らせ賜は  
りて其所を立ち出られては歸りになりました豆腐屋では元來仙  
臺様ならんと見受けましたゆゑ随分心を盡して款待し進らせ  
たるには一服の伊獲美にも有附んかど心ろの及ふ丈けは忠實し  
くして差上げましたに思ひの外なる賜はり物なるゆゑ案に相違  
致し腹立音しりますを見て女房が女房一体和郎が悪るいよ見

伊達大騒動

す知すの人の杯を世話を焼いて餘り欲張るから夜中に人を起して  
何んの馬鹿々々しい大間拔けめ………と誓しるを堪へ兼ねて  
主何んの汝れが酒落へ事を吐す其口と言ながら火箸をもつて撲  
り附けられ女房も薪を取つて打つて蒐る掴み合ふ折しも豆腐屋  
の向ふに大坂屋敷七といふ薬種屋がありす番頭が店を忍び  
出で、吉原へ遊興に行きまして今早歸りて鼻を穿ちましたので不  
止みて居りますと伽羅の匂ひ酸郁として鼻を穿ちましたので不  
思儀に思ひ其所等を見廻すに豆腐屋にて夫婦喧嘩の最中ですが  
彼句ひは豆腐屋の内より發する事ゆゑ夫婦を説き止めて傍ら  
の釜の下を見るとき古下駄が今燃へかゝつて居ります取上げて見  
ればこれ伽羅でありす番頭は夫婦に對ひ番頭コレ此下  
駄は伽羅ではないか………聞いて亭主が亭主伽羅と云せば衆とい  
物番頭此下駄は何うしたものだを尋ねられ右の情實を話しま

伊達大騒動

したので番頭そんならば仙臺様がお雇いなさつた下駄か道理  
こそ之れは私の方で買ひませう亭主夫は幾程に買つて下さる  
番頭先づ此下駄だけでも二百兩だねと聞いて亭主は慾心増長し見  
合せましたので遂に此風説高く相成りまして五百兩で右の薬種  
屋で買取りました有名の下駄のお話してお座います………

第五席

扱て綱宗公は日本橋にて喧嘩を仕懸けし曲者は高尾が馴染の客  
が爲したる所業なりと猜し給ひ一刻も早く彼れを受け出でて手  
活の花と眺めんものといふ思召しでありすから揚屋に催促  
して彼れが身の代を尋ね金子は望みに任せて取らすべしと聞い  
て三浦屋四郎左衛門は高尾を近く招き種々と説き諭しました高  
尾は心ろに染ぬ身受けなれども親方の爲めなればと涙を隠して

伊達大騷動

座しきへ出でました乃でいよ... 三浦屋此度高尾儀... 名譽に之れあります... 女郎を金子なしにて... 子望めと仰せられ... 主が中上げます... 尾をば身受け遊ば...

伊達大騷動

と奉つり升る然すれば大守様の... 何に傍座います... 細く最と柔軟き女子の身... 座います... 数多縫込ませたゆゑ... 面もせず只重三郎の事... 目を忍び給へば夜に入り... ならば高尾を見送るといふ...

伊達大騒動

で萬燈の如くに提灯を點し逃ねましてさゝめき騒ぐ賑やかさは  
又之れ別世界の景氣で座いまするれより堀へ到りまして家形  
船に召れ頼りに興に入り給ひ高尾を見給ひて 綱こりや高尾……  
と聲を掛け給へども只ひれ伏して涙に沈み居ります容体 綱子  
金を出して汝を誘ひ歸る體へ心ろに樂すども興じ慰むべき  
等なるに何事が心ろに適はぬか切て面白からぬ舉動を予に見す  
るこそ奇怪なり……と仰せに 高尾今君の求めに隨がひますは  
流れの身ゆゑ金故には奈何んどもなりはべれと元より心ろに任  
せぬ事多かり妾は勤めに申しより夜毎に替る手枕の敷々多き其  
中に島田何某といふ殿御に二世かけて習ひをなしはべる君愛憐  
の心ろあらば妾に身の暇まを賜はりいへ然すれば妾をも替へ  
後の世の道にも趣むきいはんどかき口説くを聞給ひ 綱汝と廊  
にありし時は問夫とやらん有りし由勤めの中の樂しみは爲つら

伊達大騒動

んが今予が方に来り廊を過去と思ひ何事も打忘れて予が心ろを  
慰さめ呉れよと餘念なく相見へまして高尾が膝に倚れ給へば高  
尾は涙ぐみ 高傳へ聞く小宰相の局は水に投じて其名清し建禮  
門院は義經の船に引上られて其名を汚し給ふとかやとても浮世  
に存命ふべき身に侍らずと衝立上つて船三ツ俣の瀬に到るとき  
身を川水に投んと致しました綱宗公甚はだ怒らせ給ひ 綱汝れ  
憎くき舉動左程心を通はす島田ならば予に受出されざる以前に  
奈何やうともすべき事なるを今千金に其身を賣り予れを恥かし  
めんと爲す思へば日外日本橋にて浮世渡平といふ男立とやらん  
予に無禮をなし不慮の事ありしを思へば汝じが戀しと思ふ島田  
めが爲す業ならん彼といふ是れといひ今は可愛さ失せて憎くき  
女め我れに難面なかりし思ひをなせし報ひを今思ひ知らせて呉  
れんすと高尾が髪を左りの手に握り膝の下に引き給ひ猶も口來



伊達大騒動

の短氣ひらくと起り胸元を差貫し引廻んで船端に立出で給ひ  
腰より下は水中に研つて落し猶刺し徹して捨給へば死骸は浮つ  
沈みつ流れ往きますを見給ひ打ち笑つて網汝に心を掛け  
しよりの恨みは今ぞ晴れたりと幾太刀も所り給ひしゆゑ河水も  
爲めに紅なみの高尾の紅葉と散り失せました此容体を見て流石  
の荒浪鳴神も身の毛彌立つて見て居りましたが綱宗公は手を洗  
ひ口を嗽ぎ給ひて江口の諸ひを賑ひながらお擧げに歸らせ給ひ酒  
を飲りながらは歸館になりました然るに彼高尾の死骸は三ッ俣  
の磯に流れ寄りまして土地の者之れを引揚げましたを彼の  
重三郎が聞傳へて死骸を貰ひ牛込の正源寺へ擧げりました高尾が  
郎も此事より發心致しまして剃髮して道哲と名を改め高尾が  
普提の爲めとて山谷の土手に念佛を唱へて居りましたを其後諸  
人之れを奇特の事なりと感ぜまして一ッの庵を建立致し遺はし

伊達大騒動

ました道哲は之れに栖まして常念佛の道場と相成り只今もつて  
道哲庵は彼所に現然と残り居ります事より綱宗公も悪所  
通ひの念も絶へて見へ給ひしゆゑ兵部甲斐は奸佞の族を集めて  
密談をなし再び綱宗公を吉原へ誘引ひ進らせて三浦屋の薄雲勝  
山といふ二人をお敵娼に出させましたが彼れ等兩人は綱宗公を  
慰さ免ます事高尾の如き者でありませんから君も注意に適つた  
か彼等を受出さんどろの相談に及びましたので兵部甲斐の兩人  
は最はや能き時分なりと綱宗の乱行を一々敷へ擧げまきて仙臺  
の階士へ手遣はし大守を押込めて龜千代殿を湯家督と相定めま  
して龜千代幼弱の事なれば兵部少輔をもつて番代となさんと密  
かに酒井雅樂頭殿へ談じ合せました則ち仙臺へ遣はしました  
書面を伊達安藤片倉小十郎等の披見に及びますると悉く怒る  
きました依つて家門一家を集め衆議を致しまして伊達座います其

伊達大騒動

時小十郎は安藝に對ひ 片倉兵部甲斐此赴きを諫め奉つらす又  
余所に見る事こそ心得難し……と言掛けますをシツ……と白眼  
みまして 安藝危忽の一言あるべからず彼豫讓が事は貴君と某  
し内心にあり……と云れて小十郎頭べを垂れて次ぎへ立ました  
其後安藝と小十郎は密談數刻に及びましたを知る者更に座  
ません切て忍びやかに江戸表へ馳せ行きましたる面々は片倉小  
十郎伊達安藝同安房同上野同駿河芝名天童鮎貝遠藤杯を始め宗  
徒の騒々仙臺を發して晝夜を分たす馳せ來りましたが綱宗卿は  
彼の吉原廓の海雲が許へ逃びあらせられて遊興の後ち後朝  
を惜しみて立ち別れ給ひ漸やく芝の傍屋敷へ曉方に歸りにな  
つて例の如く修門を打敲き給ひ 綱宗此所開ける……と申されま  
すけれども門番答へもなく寢入りしにや人聲も致さず二三度音  
信れ給ひしに更に答へがありませんから例の短氣増長せられて

伊達大騒動

綱宗レ汝は役は門を守る事をもつて妻子を養ふにあらすや  
今門を開けと云ふに知らざる事やある……と邊りの石を搦掴ん  
で扉も碎くるばかり門も折れよと丁々叩かれました此時門の  
物見を颯つと開き 片倉今宵の門番は片倉小十郎相勤むる所  
なり誰なれば斯く狂籍に及ぶソレ押開いて搦らぬ捕れ……と下  
知の聲 綱宗之れを聞給ひ 綱南無三寶片倉め何時の間に登りし  
や……と胸打騒ぎ胡鼠々々と立退き給ひ兩人に對ひ 綱南の門  
は斯くの如くなれば屋形へ入る事は北の門は奈何あらんか  
是も定めし一門の者守り居らんも計られず汝と等往つて見て參  
れ……と仰せに梶之助は馳せ往きまして門をホトと敲き  
荒浪此門を誰人が守りにや屋形様只今入りませられ  
ます然れども南の門は片倉氏守り給へば入り給はず爰より  
入れになりませるかと問はれて内より答へますに 安藝然れば

伊達大騒動

此の伊達門は伊達安藝相守の由を申すし、いへ……と聞て吃驚り門内を差覗き見ますれば、高提灯、羅星の如く建列ねまして、伊達家の歴々駿河をはじめ、各々並び居りました。棍之助も膝を震はせて馳せ歸つて、斯様々々上りまはす。東も白々夜も既に明け放れつて、詮方なく相見え、まじりた其内は、非なく門に立寄り給ひ、網奈んとします。けれど、入る事叶はず。是に過ぎたれと、今より後は禁何に小十郎予誤つて、若氣の夜遊び法に過ぎたれと、今より後は禁酒致し、斯の如き行状は、あるべからず。夜も既に明け離れんとせり。館に入れて呉れ……と頼りに、頼みなさる容体は、此氣の毒にも又可笑しう思はれ、ます。其時片倉は答へるや、片倉汝は某しを田舎武士と思ひ、誰にかさんとするとも、其方の中分甚はだ怪しい。我君と仰き奉つる方は、綱宗卿なり。西に島津北に加賀東しに伊達と謂れ、天下の諸侯多と、いへども三大藩と稱へられ出るには、譜代

伊達大騒動

恩願の從者數百人を召伴れられる。又非常の時、は三万余人の大將なり。然るに今、容体を見るに、漸々三人連れにあらすや、我君の威は、大なるゆゑ、悉く家中の面々の面体を知らざれど、我れ執權たれば、其名を記したる帳を持り、何の某しか名乗らるべし。我が帳に記載したる者なれば、門を開き通すべし……と聞て、鳴神荒浪の両人は、名乗るべき様も、あく閉口致して居り、まじりた。綱宗卿は今、は言解けず、べき辭もなく、天を仰いで、大いに歎き給ひ、網我命運も爰に極まつたり……と言つ、腰刀に手を掛け給へば、鳴神荒浪も俱に差違はんと身搦に及ばれました。を見て吃驚り、致し小十郎飛んで出で、綱宗卿の手に絶り、やう片倉君、君たらすといへども、臣もつて、臣たらすんば有べからず。某し君を諫め奉つらんと、言つて却つて不慮の禍ひあるときは、空しく不忠の名を流さんと、言つて涙をハラハラと落しました。又荒浪鳴神の両

伊達大歴動

人に對ひ片倉其方は何人の悴なるか家中多人數なれば面体を  
も知らずといはれぬ名は知るべき筈なるに名前を名乗れ……と  
言はれて兩人辭を揃へて兩人我々兩人は草履取より召上られ  
只今は此知行二百石宛頂戴仕つりまして當時は側に仕へまする  
鳴神峯右衛門荒浪棍之助と申す者に座ります片倉當家の儀は  
新參の者傍側勤環と申す事古來より之れなき事にして且つ新參  
の侍抱への時は執權たる某し等が知らざる事あらず殊に傍側  
へ仕へる事傍家に例なし依つて今日より永の暇を遣はす左様心  
得る……と言はれて兩人は思ひがけなき事に驚ろきまして洞然と  
して立退りました片倉表傍門より入り遊ばしし事斯る傍不  
行跡にては先祖へ對し傍不孝の至りなれば裏傍門より入り  
有るべし兼て中付け置きましたと片倉が來數百人立出でまし  
て高提灯騎馬提灯杯點し連ねて裏傍門より傍入りになりました

伊達大歴動

見ると一家一族の面々嚴然と扣へて居りままたので綱宗公も最  
と恥かし氣にて常のお居室へ入らせられた其時石川駿河當  
年十八歳伎倆骨柄抜群にして天晴れの若者で座いますそれへ  
出て平伏して駿河兵部を始め一家一門残らず上げたき旨之  
れあるに附き石川駿河に暫らくは腰の物預け下さるやう……  
と申すを聞かれて綱宗公も止むを得ませんから大小をお渡しにな  
りました駿河は引下つて居りますと伊達安藝前へ罷り出て  
安藝君傍不行跡にして此事台命に違するに於ては家の大事に  
ありますするゆゑ兵部殿甲斐杯が傍諫言に及びますれば却つて對  
面を許されず此故に何れも參府仕つり傍隱居を願ひ奉つりま  
ると聞かれて綱宗卿一言の返答もありません小十郎は兵部少輔に  
對ひ片倉茲に幸ひなるは貴殿雅樂頭殿と別感に在すれば何  
れ其の連印したる願書傍差出し下されたし……と乃で祐筆寺澤

伊達大騷動

七郎左衛門を呼出し隠ためさせました其文に  
陸奥守儀不覺悟にして大國難避に座に  
隠居仕り幼息繼千代へ家督仰せ付られ  
下し置れし様願ひ上  
げ奉つりは是等の趣き然るべく涉執成し  
をもつて家督首尾  
能く被仰付被下置は難有仕合に奉存以上  
万治三庚子年七月

- 伊達 彈正
- 伊達 上野
- 伊達 式部
- 伊達 左兵衛
- 伊達 安房
- 伊達 安濃
- 片倉 小十郎
- 田村 隠岐守

伊達大騷動

と認ためまして之れを兵部に渡しました兵部は領掌致して期は  
ち酒井殿へ参つて此願書を差出しましたたが翌日願の通り綱宗隠  
居仰せ付けられし旨仰せ渡されままた仍つて綱宗を品川の屋敷  
へ移されました家老には濱田玄蕃といふ者を附け置れました此  
事今少し延引に及びますと改易でも仰せ付けられす所るで  
座いまして今度の事他の大名商家なれば無論身上危ふき所るで  
ありました政宗忠宗等の忠勤を思召れば特別の宥免をもつ  
て品川の屋敷に整居を仰せ付けられました然れば他の隠居とは  
違ひまして改易に準じ門の出入りまで嚴殊に酒を禁止せられ  
又何品にても一應改ためて差入れます先づ當時の禁獵の体裁で  
座います

久世大和守殿

伊達兵部少輔

伊達大騷動

扱て伊達家の家臣等は綱宗公の所置は附けました。が翌日酒井雅  
 樂頭殿より奉書到來致して連名七人役宅へ出頭致すべき旨を達  
 せられました。ゆゑ各々打伴れ立つて参ります。と雅樂頭殿公用人  
 川原三左衛門をもつて川原龜千代儀幼少の間は兵部少輔番代  
 として公儀相勤めやすべき旨を仰せ出されたり。其時安藝は小十  
 郎に信と目配せ致します。と片倉委細上意の趣き畏まり奉つり  
 なく龜千代幼少にて公儀の役儀家中の仕置等如何にも思召し  
 はい番代の外に然るべき差圖を願ひ奉つります。然れども一  
 家中の諸士へも申聞けたる上追て願ひ奉つり。と云ふを取次  
 は如此々々と雅樂頭殿へ申上げました。と再び酒井上意を

伊達大騷動

返すの恐れあれば能々相談の上願の筋をすすべし。慮忽の了能わ  
 る時は家の爲め宜しかるまじと申渡され一同退出致しまして即  
 刻諸士を呼集めて評議に及びました。其評定區々なりし所。伊達  
 式部進み出で式部當時酒井雅樂頭殿の心ろに違ふ者は忽ち  
 に其報ひあり其親しきには時ならずして賞あり。兵部殿は雅樂頭  
 殿最負第一のものなれば請ざる時は兵部家の爲め悪からん。龜千代  
 殿十五歳にならせ給ふまでは。家兵部殿に任せられ然るべう  
 存じます。と聞て一座の者。迭いに顔を見合せます。が一言も發す  
 る者がありません。道は兵部殿其座にあるゆゑか。彼を恐るゝ者も  
 あつて中には此事を道理と思ふ者もありました。然るに末座より  
 一人大音に熊田各々奈何思召すや。皆な之れ君の祿を食ふの  
 士ならずや。今君の傍大事は此一擧にあり。何んぞ唯々として其志  
 さしを伸ざるか。某し不肖末座の身なれども一言を吐ん……と呼

伊達大騷動

はる聲に驚いて之を見るに身の丈六尺餘りにて仙臺一帯の益勇  
と稱されたる熊田甚五兵衛秀國といふ者であります甲斐は見る  
より原田一家一門中も未だ口を開らざるに無禮なり其所退  
ぞかれよ……と言れて熊田國を賣り名を盗むの賊と忠義無二  
の某まど心ろの尊とき事は雲泥の相違なり……と言放つを見て  
田村内藏助進み出まして内藏遣は法外なる一言又兵部殿を誰  
とか思ふ龜千代君の大叔父にして綱宗公の伯父なり鹿忽の無禮  
緩怠なりといふ尾に附て式部國を賣り名を盗むの賊なりとは  
何者をさして言るゝぞと刀を引寄せて反打すれば甚五兵衛は  
熊田汝と國を賣るの盜賊にあらずや……と言れて嚇つと式部は  
怒り既に珍事に及ばんと致しました安藝安房小十郎等驚ろいて  
双方を取鎮めました甚五兵衛に對ひ片倉式部は一家の歴々な  
り然るを彼は無禮に及はるゝ段不屈きなり奈何なるゆゑをもつ

伊達大騷動

て國賊なせ、言るゝやと問れて未だ怒氣止まず去て熊田され  
ば甲斐兵部殿こそ國賊なり然るを雅樂頭殿と惡意なるをもつて  
其威強きゆゑに各々を始め斯る大切の評議に心を苦しめ給ふ  
所なるに式部一人差出て兵部殿を番代となさんといふ伊達家  
代々番代の例なし各々之れを存じながら兵部殿の威に恐れて既  
に事極まらんとせり君恥しめらるゝ時は臣死すといへる事あり  
某し三十年の命を捨ざれば何ぞ此權勢を挫ぐ事をなさんや又綱  
宗公若年にして血氣盛んの時此權勢を挫ぐ事は幾度もある  
べし世上の諸侯に斯様の事往々ありといへども其家の元老智臣  
諫め争つて行跡自から直る然るに兵部殿甲斐は諫を入ざるの  
名を借りて却へて是れを嘲むる事は某し小性頭の末に列されば  
朝夕に之れを知る所なり是れを諫め奉つらんとするに其隙な  
く強て諫めを奉つれば刑三族に及ぶ某し是を恐るゝにあらざれ

伊達大騒動

とも只隙ある時甲斐と死を試みんと思ひ今日に及べりと齒噛み  
をなして甲斐を白眼つけ飛懸らんと致しました小十郎下知を傳  
へて甚五兵衛を長屋へ歸らせまして後ち一同へ對つて片倉甚  
五兵衛は狂氣と相見へまする聊か心ろに掛け給ふなど挨拶致し  
ましたので式部甲斐の兩人も怒りを鎮めました時に兵部は進み  
出て兵部氣違ひめの爲めに大切の相談延引致せり各々了簡の  
程承はりたしと云ふ時石川駿河進み出で駿河拙者熱々考へ  
いに伊達家に番代の例もなければ幾度も免許の儀を願ひ叶はざ  
るものなれば各々の胸中にあるべしと聞て片倉と伊達安藝を始  
じめ此儀然るべしと評議一決に及び一同退散致しまして兵部は  
原田を目配せして立去りました甲斐は直ちに兵部方へ参ります  
と兵部今日既に大望極らんと致せし所ろよしなき奴が邪魔を  
して我が願ひ叶はず汝と妙計あらば彼等が心底を挫かしすすべ

伊達大騒動

し原田委細承知仕つれり然し只今事を荒立ていは片倉始め  
背くべし然あれば謀叛の輩として家断絶に及び望みの事は初置  
き腰抜の名を世に流さんか幸はひ君は酒井殿と無二の別懸な  
れば潜かに越しあつて一味の事より諸士の問答仰せ述べられ番  
代の事請けまじとならば若し田村隠岐守殿相見に致さるゝか  
彼の田村殿の性質を見らるに柔弱にして心の儘に計らるべし其  
後龜千代を毒殺して君と某し日來の望みを果すべしそれ付き  
毒殺の事こそ最と大事に道は功者なる醫師にあらざればなし  
得まじ依つて愛に大場遊益とす醫師は適當の者と存じます渠  
が子に宇右衛門といふ者を招きあつて奈何にも思を施し給  
ひ遊益が其恩を感ずる時をまつて彼に毒薬を調合致させ若し露  
厭致す事あれば君怒りに堪ぬ風情をなして立地に遊益を討果  
し給へ先づ宇右衛門を召出されて決意なされし龜千代死去



伊達大騒動

致せは伊達の家の治め給はん誰か固辭す者のいはんや只  
憎きは安藝小十郎の兩人にて是れども少しの越度を見附け押  
籠めやすか又は喧嘩にて討果しやさん事某しが方寸にありま  
れば偏へに上向の計らひ酒井疾へ頼みなされたし兵部上  
みの事少しも氣遣ひなしと猶種々に密談を致しまして歸りまし  
た扱て翌日安藝小十郎等は酒井の屋敷へ参り番代の儀は先規よ  
り之れなきゆゑ高免を願ひ奉つると述べた雅樂頭殿對面  
つて酒井番代の儀家に之れなき段違て相願ひに付それは差  
置き幸は伊達兵部少輔在江戸なれば後見仰せ付られは左様  
相心得やすべしと承はり伊達安房進み出で安房毎度上意を  
戻り恐れ入り奉つりいへども田村隠岐守を後見に召加へられ  
は有難き仕合に存じ奉つり升る其ゆゑは陸奥守國廣く一人の  
後見にては心許なく存じ奉つりまする酒井隠岐守出府次第仰

伊達大騒動

せ付けられるのである……と承はり一同受けを致して歸りまし  
た乃で諸士は幼主龜千代殿の成長の間は仙臺に於て諸士月番を  
もつて城番を相勤めました茲に彼の荒浪鳴神の兩人は呼戻しま  
して荒木和助神並三左衛門と改名して先知の如く二百石を與へ  
置きました其後大坂道益が梓宇右衛門を近習に引上げ又今村善  
太夫横山彌次右衛門等に目付役を附け邊金兵衛を小性頭に  
取上げ原田甲斐は江戸定請となして兵部少輔が心ろの儘に取計  
らひました又過般評議の節妨たげを致しました熊田甚五兵衛は  
仙臺へ追下しまして乱心ものなればといふので殿しく座敷半を  
修繕ひ之れへ押込めました然れば兵部は龜千代の後見となつて  
内外の事を取行なひ居りますゆゑ日來の望み成就せし心地致し  
て之れより龜千代を毒殺なさんと甲斐を召寄せて此事を談じま  
す原田龜千代を毒殺致さんことは手を返すよりも安けれ

伊達大騒動

も茲に六かしきは安藤小十郎の兩人なれば渠を除かずんば行な  
ひ難し依つて某し熟々思案致すに安藤を亡ぼす究竟の事があり  
まする先年安藤へ伊達式部領分の内谷地七千石の地所があり  
ます然るに彼谷地伊達式部領分の内へ交りゆへ式部が城下まで  
安藤が家來毎年立越へて見分を致します依つて式部は口惜き事  
に思ひ谷地を式部より預りたき旨願ひへども其議に相成らず  
式部へ伊達預けにありますれば安藤が又恨み奉らんと思召して  
忠宗公も事を左右に寄せて免し給はざりき今式部に書状を送り  
渠を怒らせて谷地を願はせて安藤が勘忍なり難き事を催ふし渠  
が手を出すをもつて罪に落さん事掌の内におり元來式部は君に  
志し深ければ差圖せられなば成就致すべしと申すを聞き兵部宗  
勝大いに歡喜んで早速式部方へ書面を送りました然るに淺智短  
才の式部忽ち怒つて式部我れ思はざる恥辱を得たり早速安

伊達大騒動

蕨が方へ踏込み有無を決せんと欲すソレ玉を鑄る弓に弦を掛け  
ろ………杯と血眼になつて嘔ぎましたゆゑ老臣原田作右衛門進み  
出て作奈何なる事にて伊達座いますか式部安藤は二万石の領  
地我も又一万五千石の領主なり然るに安藤に思ひ替らるべき謂  
れなし依つて彼を討つて後ち切腹して相果て黄泉に趣むき忠宗  
に一言の恨みを云んと存するなりと聞いて大いに歎息し又餘り  
見戯に均しき事なれば思はず噴出して作アハ………と笑ふを見  
て式部はいよ／＼怒つて式部我れ今身を果し家を亡ぼさんどす  
る時に至り汝は何をもつて笑ふサア返答に仍つては眼にも見  
せんと刀に手をかけて詰寄りました作右衛門は猶々可笑しくな  
つて作ウフ………アハ………と笑ひますと式部は今堪らず一  
手を引抜いて斬つて蒐らんと致しました近習藤井五郎八周章て其  
手に越り止めて藤井作右衛門はお家の老臣既に七旬になれり

伊達大騒動

一言を聞いて、理あれば許し給はん事然るべし……と言つゝ、作右衛門に對ひ「其許も至極の誤まりとすもの事由もすさず只笑つて居ては無禮ならずや君過失あらば之れを亂すが職の職を捨給ふ事やある……と言れて作右衛門涙を流し、作某し不肖なれども忠を盡し死をもつて諫め争ふの道は知り然れども狂人に對して諫むる辭なし又安藝殿の預かり給ふ谷地は先祖公以來にして諫むる忠宗の能く知らせ給ふ所ろにあらす安藝殿は仁義に厚き伊達家の元老然るに今職者の一紙を得て忽ち心るを動かし干戈を郡内に起さんせらる凡君の祿を喰ひながら私の事に命を捨る者は之れ賊なり某し陪臣にして賤しき身なりといへども此理を知れり況んや一方の主たり斯くの如き人をして君たりし事を笑ふて我君を笑ひしにあらす天斯くの如き人をして君たりし事を笑ふ依つて某しの謀る所ろに因れば彼書を安藝殿方

伊達大騒動

へ持參して其儀をもつて彼地を求め給はば安藝殿は義氣金銀の如き方なれば歡喜んで與へらるゝなり古語に龍虎争ふ時狐は其虛に乘るといへり之れ佞人あつて士を避けるの謀計と見たり某し君の仰せに隨がひ奉つらす白及の下に老命を断つ事元より望む所ろにありますと理を盡して諫めました聞て式部も始めて悟りまして式部我れ安藝に彼書を送る事は甚はだ穩便に過ぎたり過ぎたるは猶及ばざる如しといへば千代殿へ願ひ奉つらんと欲す汝は奈何計らはんやと承たまはつて作某しの形様幼君なれば是非を定め給ふまじ然る時は佞人の助けとなつて彌ひの基ひ是れより發せん事必定なりと天を仰いて歎息し致しませした甲斐は手を拍つて大きに歡喜ひ潜かに兵部に對つて

原田謀計既になれり安藝が亡びん事此一件にあり其故いかん  
なれば彼地三分一を式部に與へ遣はす旨安藝方へ送受さる  
時は君命に隨がはざるの罪を責て彼を隠居にせしめ又隠便に與  
へ遣はせば三分一を名として却つて式部方へ三分二を遣はしな  
ば安藝は立腹して式部方へ斷りに及ぶべし然すれば式部が安藝  
を恨むる事深ければ返し遣わさ然る時は安藝又願ひ出る之れ  
私しの事をもつて上を輕んずるを名として彼を失なふべしと聞  
て大いに觀喜び即ち同腹の一味今村善太夫志賀右衛門横山彌  
次右衛門濱田市郎兵衛の四人の者共へ地割の役を付けまして  
仙臺へ差遣わしました相人は安藝で座いますから今私しに  
關係つて主家の安危を余所に見る如き愚者にあらす此一條は暫  
らくお預かり申して乳母淺岡のお話しに移りまするが鳥渡一喫  
敗して後席に……

第七席

茲に龜千代殿の乳母に淺岡と喚びます者は伊達安藝の妹で座  
います之れは龜千代殿の家督相續ありし時に安藝淺岡に對つて  
安藝今度兵部殿の事甚だ愚意に落すといへども台命重ければ  
兵部をもつて後見とせられたり我等仙臺に歸る上は佞人奸臣  
側に充満してあれば其害あらん事を恐る依つて種々思慮を廻ら  
すといへども力及ばず幸はひ汝は既に補佐の任に適すゆゑ小十郎  
母とあさん事を思ふが汝は才能く補佐の任に適すゆゑ小十郎  
と我は既に得心したり粉骨碎身して必らず道に違ふ事なく慈に  
勝はれて徳を失なふ事なかるべし幼君の守りたる身なれば其身  
を憚しむ事を先とすべし……と言れて淺岡感涙を流して淺岡  
妾は死をもつて之れを誓ふ然し奈何に力らを盡すといへど一人

伊達大騒動

の婦人の方らをもつて救ふ事能はざる時あらんも知れず兄上誰  
にても忠士を撰んで妾が心ろの助けとなさしめ給はれよ 安  
開は道理の事なり我れ既に其人物を撰み置きたり之れ別人なら  
す松前鐵之助重光なり此者を幼主の守り役たらしめんと言聞せ  
まして直ちに鐵之助を呼寄せ安藝其方を招きたるは餘の儀に  
あらず今より幼君の傍側に傳べりて心ろを盡し身を慎しみ忠を  
全たふして君を悪きに趣むかしむる事なき様勤むべしと懇切に  
申諭しました松前之承はつて是より淺岡と共に晝夜心を附  
けて油断なく忠志を無二に勤め居りました頃寛文七年九月廿  
七日の朝龜千代君へは飯を進らせんと致しました此時園田善兵  
衛が密かに告げましたに依つて鐵之助は眼を配つて扣へて居り  
ますと淺岡は何心もなく既に鐵之助を差上げんと致しました時鐵之  
助は聲を掛けて何心なく既に鐵之助を差上げんと致しました時鐵之

伊達大騒動

岡も胸先づ騒ぎ肉動けば早速に配膳の者を呼びまして 淺此  
三郎進み出て 丹イヤ何の異なる處ろなし速かに傍上みへ進ら  
せ給へ 淺妾は君に怪しきを奉らすと言ふ此は飯其色怪し 丹  
を鐵之助進み出して 鐵膳部の味を致さるべしと言はれて 淺澤  
丹三郎絶命の場合となり止む事を得ずして終に淺岡松前の  
面前にて一口宛是れを喰ひますと何かはもつて堪るべき忽ち  
面体より惣身紫色に變じ惱亂して血を吐事夥たしく其儘絶  
して倒れました淺岡松前此体を見て大いに驚ろき直ちに田村伊  
達の家へ右の情實を申遣はしました田村隱岐守より斯様々々  
と麻布二本根の兵部殿方へ申送りました其返答に「只今うれへ  
罷り越しはん暫らくお扣へ下されといふ田村殿は準備をして

伊達大騷動

今や來るかど待居りますに兵部少輔は田村殿へ斯く返答して直ぐに馬に打騎つて芝の屋形へ馳付けまして當日の當番の料理人國田善兵衛始め大場道益等を呼出し兵部汝等不義の行跡言語同断たる由者なりと怒つてやますを道益は既に口を開いて何事か言出んとする所を抜打に所倒えました國田善兵衛是れを見ても善兵衛大悪……と言を發せんとする奴を之れも所捨ました其他奥女中又は一味の族悉く引出して自身に是れを切殺して仕舞ました際岐守殿は兵部の來るのを待ましたが其沙汰がありませんから既に刻限も過ぎますゆゑ使者をもつて火急の事なるに延引奈何なる次第疾々越しなざるべしと申送り申すも彼兵部が家來にも家來且那は疾くに罷出られましたと聞て早速立歸つて主人に斯くと申上げ申すと隠岐守大きに驚ろき田村通は心得難き事あり兵部が爲に謀られたるかど怒りを含んで即刻

伊達大騷動

屋形に馳付けて見ますに兵部悉く刑罰を行なひし後の事でありますから其事情も甚だ曖昧に見へますゆゑ田村某し使者を馳て此事を貴殿へ申送りしに談せらるべき旨ありとて扣へ罷り在れどの事なるに付き渉入來を相待居たれと餘り時刻後れに依つて再び使者を馳たるに貴殿は某しを謀り屋形へ馳付けられ殊に一人の計らひをもつて所置せられし事愚意に落す某しも台命を蒙り貴殿と伺はれし事其意を得ずと云れて兵部は打笑ひ罰を己が儘に行なはれし事其意を得ずと云れて兵部は打笑ひ兵部某し決して然やうでなしに知らせゆゑに只今罷越し談すべき由を申たるのみ開は使ひの承り違ひか變ある時は事を延々に計る時は惡徒を除く事能はず依つて我れ悉く殺害致したるまで他に所存あるにあらずと申すを聞て田村も辭なく仍つて餘黨野蠻に及びますすけれども當日掛合の者は兵部が悉く殺したる

伊達大騷動

ゆゑ奈何んどもなし離く終に誰の仕業ども分らずに事済みまし  
たゆゑ浅岡は熱々と考へますに浅岡彼兵部宗勝が此度の容  
体最と心得難き事多し彼者共を捕へ置き拷問致して餘黨を探ね  
索むべきに其所謂を問はずして切殺したる事又大場道益が所爲た  
る事を知つて彼を殺したる事の二ツ田村を出し抜き自己が心ろ  
の儘に事を行なひし事はれといひ彼れといひ日來の爲体く兎角  
兵部が悪事に極まれば然れども大切の事危忽に人に語るべき事  
ならず胸の城なる安藝が許へ中送りたまは然して後ち浅岡は  
して脇屋の城なる安藝が許へ中送りたまは然して後ち浅岡は  
夜心ろを盡し變あらん事を思ひ用心に怠たりありません浅岡が  
君の心側を居ります時は鐵之助外を守り松前が内を守つて居れ  
ば淺岡外を守つて居りますので隙を窺がひまする奸賊等は便宜  
を得ません猶淺岡と松前は心ろを合せて自己等が食をもつて

伊達大騷動

千代君に進らせ幼君の腹は何時も庭上に捨てまして鶏か犬  
に食はして仕舞ひます是れ毒殺のあらん事を恐れ用ひ心で  
座います然るに鶏犬の死したる事両度是れ皆な毒ありしゆゑ  
あります其外菓子茶總べて口中へ入る物は皆淺岡松前密かに  
れを取調べまして人々に知らさず捨ました其心苦奈何ばかりか  
に古今例し少なき忠節で座います茲に彼の道益が悴宇右衛門  
は至極實体なる者で父道益が悪徒に與せし事は夢にも知らず只  
兵部殿の厚恩の程を且暮れ有り難き事に思ひまして兵部殿を主  
君の如くに尊敬して居りましたが此度父道益奈何なる罪にてか  
兵部殿の手討に致されしより俄かに兵部殿を恨み憤はりまして何  
卒して父の仇を報はんと中心に思ひ絶へず兵部少輔は又右衛  
門が舉動に眼を着けまして兵部彼れが心ろの内何んども心得  
難し高一親の敵坏と思ひ我れを恨む時は大望の妨げなりよふこ

るあれ……と階かに荒木和助を呼寄せまして右の概略を語りま  
す。和助人知れず彼れを殺害し君の心臓を安んじ奉つらん  
兵部然らば善は急げといふ事あり宇右衛門が部屋を伺がふて見  
ると云れて和助畏まりました……と密つと彼が部屋へ参つて  
見ますに宇右衛門は顔に物の本を載せたまゝ、盗寝をして居りま  
した和助は拔足致して彼が能く寝入つたる上へ跨がり咽笛へ両  
手を掛けまして力らに任せて締付けました角力取りの和助が力  
量何かはもつて堪るべき手足を揉掻いて息絶へました兵部は此  
事を聞いて大いに歡喜び兵部先づ邪魔を拂つたり……と言つて  
酒宴を催ふしました悪徒輩隙を窺がひますければ……と言つて  
殿しければいかんとも施さすべき策なく依つて密談を致して淺  
岡松前を罪に落さん事を謀りまして其機會を待つて居りました  
此方は淺岡松前息らす能千代君を守護致して居りますと夜も深

更に及び既に四更の圍る微かに人の足音が次の間に聞へますゆ  
ゑ鐵之助怪しみて是れを見ますに大いなる風が龜千代君の枕  
元へ駆け寄らんと致します鐵之助彼の風を追かけて鐵エイト  
一歩踏したかに打ますと「キャツと首つて逃げ出しました之れ  
風の聲にあらず鐵汝れ……と飛掛つて捻ぢ倒しますとひく  
くど動きます所るを用意の鐵扇をもつて丁々ど續け聲に三ッ  
四ッ響ちますと忽ち死ました明朝取捨んといつて捨て置きま  
すに終に人の形容になりましたゆゑ鐵之助驚ろいて之を見るに  
菅野小助といふ忍術の名人で座います頭骨を碎かれて死んで  
居ります鐵之助密かに是れを取捨させまして他人に語りません  
から知る者は座いせん又或夜龜千代君へ往き給ふゆゑ鐵  
之助は附き上げて前後に眼を配つて往きますと襟の下に何物  
か見へまして其形ち怪しきゆゑ龜千代君を抱き進らせて猶能く



伊達大騒動

透し見ますに眼一ツにして其光り凄まじく口長く色青く光つて  
見へますゆゑ近習小性等驚ろき怖れて倒れ伏しました鐵之助龜  
千代君を淺岡に抱かせ進らせて彼れを待つに近付き來るを無手  
と組付きました彼者組れしを振放つて逃げ去りました之れ何者  
あるか相分りません淺岡は鐵之助に對ひ 淺先夜の風と今宵の  
怪物其類同じからんか…… 鐵之助…… 音高しと留めそれより  
龜千代君お庭へも出給はざる故に…… 運動も足りませんから自然  
と病氣の体に渡らせ給へば淺岡は大いに心を苦しめ種々に  
祈念杯致しますすが更に其験も見へません爰に小性頭の渡邊金兵  
衛龜千代君の目前に出て 金此間の天怪不思議の第一に存じま  
す龜千代君の不例に渡らせ給へば一家中の者心安からずそれに  
付き某がし承たまはり及びましたに赤坂邊に奇妙院といふ修験  
者がありませす此者は先達ても薩摩様或ひは藤堂家杯へ祈禱に參

伊達大騒動

り其験し實に妙なりと承はりました之れに祈禱を致させては奈  
何で座るかど聞て淺岡松前の兩人は唯幼君の快氣のみを思  
ふ折からでありませすから金兵衛の辭に随つて彼れにその修験者  
を頼みました金兵衛は心中に歡喜んで甲斐に如此々々と談じま  
すと甲斐も歡喜び直ちに何事か私語き示して赤坂の奇妙院方へ  
遣はしままた此奇妙院といふ修験者は金兵衛が部屋住の折に博  
奕の友として馴染ました者にて金兵衛の顔を見て 奇妙院是は  
金兵衛様誠ににお久し振りにお目に掛りますいつもは壯健で結  
搦で座います 金兵衛同様斯うしては掛るのは何より重  
疊…… 奇妙院和郎様は大層立身なすつた容体拙僧等は相  
變らすの貧乏でお恥かしう存じますッ今日は何修験の修座い  
ますか能うこそのお入來…… 金私しも昔し部屋住の頃は晝夜  
博奕で日を暮しは馴染やたゆゑ懐かしへては尋ねやしました

伊達大騒動

奇妙院はこれに... 金貴僧を頼み... 奇妙院はこれに... 金貴僧を頼み... 奇妙院はこれに... 金貴僧を頼み...

伊達大騒動

た金兵衛は心得... 奇妙院はこれに... 金貴僧を頼み... 奇妙院はこれに... 金貴僧を頼み...

伊達大騒動

さらば押揉んで不動の眞言を高聲に唱へ丹精を抽んで祈り立て  
ました暫らくして蘭經を止めて 奇妙院の病氣の形象甚はた六  
かした姿なり是れなる幣動く事又橋の葉散々に落ちますは之  
れ命の終らんとするの象ちで傍座います若し否らざれば  
案事に及ばざる儀に傍座いす断はり登き又高聲に經を讀み  
眞言を唱へ汗水になつて修行致しましたが道は不思議幣の動く  
事夥しく且つ櫛の葉悉く散り失せました家中の者目と目を見  
合せ驚ろき居りました其時奇妙院は檀を下りまして 奇妙院奈  
何にも命危ふき事風前の燈火に均し拙僧之れを占筮ひ壽命  
の程を考へ奉つらんと驚ろける紙に包みました筮竹算木を取出し願  
りに考へまして最と驚ろける業にして地中に物あり東の方五丈  
へまするに之れ全たく呪咀の業にして地中に物あり東の方五丈  
に當る所に其呪祈の證ありまると聞て重光淺岡の驚ろき一

伊達大騒動

方ならず然し彼れ何事をかすぞ心ろに思ひ 鑿法印の詞とは  
いへども今龜千代君に此舎弟もなく此家に乱臣もなければ奈何  
にして呪咀環を致さんや 奇妙院某し行法決して空しからず  
金皆な之れ君の傍にあり何んぞ私しに争ふに及ばず兎に角  
法印の示されし所を檢たむ見られよ乃で東の方五丈と聞た  
れば其所を求るに雨落の下に方四寸ばかりの箱がありまして釘  
をもつて是れを鎖す金兵衛之れを取上げまして一同列座の前へ  
持來つて見ますに箱の中に人形がありまして之れに釘を打つ  
たる事四十四本他に呪咀の願書を籠めありまして其文に龜千代の  
命終らば白川主殿が子を立つて陸奥守たらしめんと明らかな記  
し願主兩人と傍座います金兵衛大いに驚ろき 金之れ呪咀の文  
を許さず 金之れ正しく家を乱すの證據なり…… 淺汝と亂れり

伊達大騷動

に人を誣るとも我等に何の過失あるや 金呪咀の願書も爰にわ  
り争そふとも遁るゝ所なしと言はれてます 怒り 淺岡妻は  
金大謀は忠に似たりといへり汝等此願書に兩人とあり疑がふ  
所ろなし 淺岡妻が所為たりといふ證據ある事か 金此文中に主  
殿が子は汝じが實子ならずや汝じ争ふとも今は道なしと聞て  
松前も膝を進めて 鐵某しが所為とは奈何に……と聞て呵々ど  
笑ひ 金此願文汝じが手跡に相違なしと言はれて之れを見るに偽  
書なれども我が手跡に寸分違ひませんから驚ろいて暫し辭もな  
く黙然として居りました兵部は大いに怒つて 兵部兩人共大惡  
露現なり最は是非に及ばすソレ金兵衛彼等を引立て入牢させ  
る追て詮議をいたす 金長まりましたと既に引立んといたしま  
した……

百四

第八席

伊達大騷動

是る所へ田村隠岐守殿参られまして其故を問れますゆゑ兵部  
は右の願末を告げられますと隠岐守殿奇妙院に對はれまして  
田村汝じ呪咀の事を占なひ龜千代殿の災禍を退ぞげんと致せし  
は誠に不思議なる術なりと仰せに法印 奇妙院抽符儀は本山の  
鯛れ下にして松門院とすすを継ぎまする法印祈禱又は占ひ等に  
奇妙なるゆゑ世の人松門院と唱へず奇妙院と喚びまする 田村  
誠に妙なる術を得たる物かなさらば某し頼み度事あり余の義  
にあらす此度龜千代殿は病氣と聞き妙薬を關のへ來りしが今某  
しが懐中にありや又宿所にあるや汝じが妙術をもつて有無を占  
なひすべしと言はれ奇妙院は「ハッ」とばかりに頭をさげ赤面  
しました 田村汝じ是れ式の占なひに返答遅き妙術は必辭なし

百五

伊達大騒動

サア何うじやと問はれて法印惣身冷汗を流し考がへますが元來  
偽り事なればなかく一言も發し得ません隠岐守殿大いに怒り  
給ひ田村扱ては汝れ等は願人坊主の類ひなるべし殿敷拷問致  
しなば一ツ穴の狐共化の皮も願はれんなれども先此度は赦し遣  
はす下り居らふ……と言はれて奇妙院顔色忽ち土の如くに變  
じ番僧諸共に裏門より胡鼠々々跡をも見ずして逃げ去りまし  
た田村殿は淺岡松前に對ひ田村虚名一度び晴さん事案の内な  
り然し兩人なくんば争でか鼠の害ある事を遁れん……松前士  
たる者謀計に陥て空敷死するとも某しが怨靈此所に止まつては  
側に附進らせんと言つ、刀を取つて既に自殺なさんと致します  
を淺岡は取絶つて淺今死すれば虚名も實事とあつて末代まで  
汚名を止め給はん日來の氣質に似合ざる短氣にわらずやと言れ  
て涙を流して松前某し何の面目あつて衆人に面てを合されん

伊達大騒動

淺岡彼の豫譲は其身に漆しを塗つて主の爲めに難難したるを知  
り給はずやと言はれて大いに耻ぢ死を止めました然るに既に衆  
議一決して刑罰を定められまして兩人を引出さんと致しますと  
龜千代君此事を聞き召し龜千代汝は何んとして予が乳母や守  
の兩人を引出すのじやと仰せに金兵衛呪咀の事を聞き聞に入れま  
した龜千代君は笑つて龜千代昔日に淺岡が予に語り聞せしに  
順逆に差別あり白き絹を取つて黒きものを注けば黒くなり朱を  
注げば赤しと言ひ心直なるもの何んとして神祇の咎めを受け  
んや予れ幼稚しといへども大國の主なり悪人を近付る事はせ  
じ善惡別なし淺岡が忠義は予れ能く之れを知る殊に婦人の身な  
れば予是れを恐るゝに足らず鐵之助は男子なれば罪を赦して後  
を替へ淺岡は予近習に召仕ふのじや然れども鐵之助が功は少な  
からず依つて彼を苦しまするな……と仰せに金兵衛驚ろいて早

伊達大騒動

速に君の仰せを兵部隠岐に如此々々告げました兵部は聞て  
兵部若輩の龜千代が同取るに足らず速かに是れを殺すべしと聞  
て田村事の疑がはしき書を裁せたるを名として茲に迷ふ之  
子を立て家督たらしむる事を包むの現はれて事を起すを書べきや  
れ察するに凡そ己が名を包むの現はれて事を起すを書べきや  
うなし是れ一ツ又斯る願書ならば神社へこそ納むべきに地中に  
埋む是れ二ツ文の体事を偽はつて實情なし是れ三ツ爰をもつて  
淺岡が事罪定め難し其上淺岡松前等は仙臺一家の面々見立をも  
つて是れを附け置きたり今罪の疑がはしきを殺さん事某し之れ  
を好まず松前が手跡をもつて證とすれは是れ偽筆なるか斯る謀  
計珍らまからず龜千代の辭誠とに理に當れり大國の主は幼少  
なりといへども斯く有りたし又淺岡が罪を赦せば彼れ眞實  
斯る謀叛あれば猶幕る事あらん其時を俟つて之れを制するとも

伊達大騒動

遅かるまじ若虚名なる時は其仁慈に感じて忠義日來に倍すべし  
鐵之助が罪は後日に乱明せらるべし暫時外様に遠ざけ彼が舉動  
と見て所置するとも決して書あるべからず……と理非明白に申  
されましたので兵部甲斐も之れを言黒めます事能はず終に其儀  
に隨がひました之れによつて淺岡は異變なく近習にあつて乳母  
は元の如くでありませぬ鐵之助は外様に遠ざけられましたので  
猶々寝食を安んじませぬ侍々思ひ廻らしませぬ鐵我が忠節の  
ある事を安んじ殿が知つて撰みに與かり幼君の守り役を致し居  
りたるに圖らず今度彼等に計られて不忠第一の名を犯せしこそ  
殘念なり我虚名を蒙り主君の側を放るゝ上は其誓固こそ心  
許なしよし今宵より人知れず勤仕をなさん如じと龜千代君の  
夢居間の様の下へ這入りまして毎夜是れを守護致しました或ひ  
は炎暴蒸すが如き暑中又は肌へも氷るばかりの極寒の夜といへ

伊達大騷動

とも更に一夜の怠たりなく、三ヶ年間の心を碎き身を粉にして直宿を致しました。此鐵之助の如きものは實に稀なる忠義で、伊座います然るに或る夜の事で伊座います。渡邊金兵衛は種々の美事なるお菓子に折り盛飾りまして、龜千代君の前へ持参致し、金此伊菓子召上られませ。……と言つ、其所へ差上げました。龜千代君には何の心もあらず、右の菓子を食し給はんと致されました。時淺岡は之れを制め進らせ、淺夜中の食事は伊座へ遊ばせ若し召上るならば鬼役の者に試み致さして後ち召上られませ。……と彼の折を此方へ引退けましたを見て、金是れは淺岡殿のお辭ども覺へず某しが勸め奉つるお菓子に何んの怪しき事がありませるか、然やうに思し召ならば某し鬼役を任りませうと一ツ取つて是れを喰ひ、金此通り某しが伊試み仕つりました。サア召上られませ。……と勸めませ、又淺岡が制し止めまして

伊達大騷動

鐵金兵衛殿を疑ひませ、そのでは伊座いますせんが暫しお待ち下さいますし……誰か鬼役の當番……伊前に用がある出られいへ……と呼ばりました。金兵衛は面てを損じて、金只今某しが試み致したるを見られながら、未だ不審に思はれるなら、足下が試みをして見るが宜しい。鐵遣は金兵衛殿前をも憚らず、餘り猛々しく妾を落さんとせらるゝは何事でも座る妻も伊達安齋が妹にて武門の家を生れ、身なれば筋なき事に恐るゝやうな卑怯は致しませぬ。……と言ふ時、鬼役の者伊前に進み、伊達安齋は命の惜しき事は同じ事、金兵衛殿の力身立ち甚はだ不審に思ふ足下必らずお逃げなされるな。……と言ながら、龜千代君の愛し給ひして、と喚びます。狎を呼びまして、彼お菓子のうち、麗はしきやつを一つ取りまして喰せました。狎は元より畜生の事なれば、悦んで喰べて仕舞いました。が忽ち間に、悶へ苦しみ、惱亂して、四足を縮めて死

伊達大騷動

ました流石の金兵衛赤面致して其儘表へ出て胡風々々立歸り  
ました夫から病氣と稱へて一向仕も致しませんでした  
た龜千代君には狎の死したるを多聞なされて 龜千代彼の金兵  
術が悪き菓子を持つて来て大事のてじを殺した  
を淺岡は見て 淺岡「コレ殿様私しより外の者が何を差上げまし  
ても必らず召上るのでは座いませぬ若し過刻に召上られ  
ては覽じませてしが様に死まする狗千疋より一人の命が重い  
と承はりますまする私しゆゑに秘藏のてしが死ました事多聞忍遊  
ばし下されませ……コレてじよと彼犬に對ひ「殿様の多聞愛を  
蒙じり殿様の傍に命を落せし事畜生ながら忠義を盡した過  
報なやつ……」と落涙に及びました切て寛文の十年八月十五日の  
事でありますと奥州脇屋の城主伊達安藤宗重には一家中を召集  
めまして 安藤今宵の月は都人も賞し眺むるに殊に一點の雲も

伊達大騷動

なく澄たつたる良夜なれば各々一献を過して呉れ…… 家來有  
り難き仕合せ然らば頂戴仕つりますると酒宴に及びまして時を  
賦するもあれば和歌を詠するものもあつて一同興に入りまして  
悉く沈醉致しまして次の間に伏し倒れます者もあれば自己が  
部屋々々へ歸る者もありまして既にその夜も丑滿の頃及となり  
家僕從者等が前後も知らず高屏のみに聞へて最と寂寞として  
かに庭の木草にすだく虫の音のみ牙へ渡りました時に今まで  
立てました虫の音一度に止みましたゆゑ安藤は不思議に思ひ  
邊りを窺がひ居るとも知らず彼方の薄の茂みを押わけて立ち出  
たる一人りの曲者頭巾をもつて面体を包み身は黒装束にて  
致して「リ」と横側に近付き安藤が居間を窺ひ障子に耳を  
寄せて四邊りを見廻し居ります容体安藤は熱々に見濟し是盗人  
にあらず曲者なりと思ひまして臥したる体に夜具を拵らへ置き



伊達大騒動

窓つと屏風の蔭に隠れて彼が舉動を窺がひ居りますを彼れは知  
らす夜具の上の蔭に跨がり二刀まで差貫しました安藝は待ち設けた  
る事なれば屏風の蔭より隠り出て忽ち地ち彼れを捕つて押へ安  
藝何者なるぞ真直に白状しろと責つけられ曲者無念口惜し遣  
は仕損じた斯くなる上は何をか包みゆさん某しは片倉小十郎が  
家來松井郡治といふ者であります當時殿には幼年にして仙臺  
の國政は主人一人に歸すべきに稍もすれば安藝に權威を奪はれ  
無念に思ふゆゑ某しに廊屋の城中へ忍び入安藝を一太刀に刺殺  
すべし若し首尾よく仕課すれば妻子を宜しく取立得さするとい  
ふ主命にて忍び込みしに運の盡たるか言甲斐なく生捕れしこそ  
殘念疾々首を刎給へ……と聞て安藝汝は小十郎が謀計なれば  
假令拷問に遇ふとても早速に白状は致すまい然るに組敷るゝや  
否小十郎が家來とすすころ訝かしき奴だ察する所る汝れは江戸

伊達大騒動

表よりの間隙者ならん之れ小十郎と拙者を反間の謀計に落し  
れんとするとも此安藝が是れしきの事知らで有るべきか先づ半  
獄に押込め置く……コレ誰か居るか……と呼はる聲に次に降伏  
したる家來一人眼を覺して家來何んだ主人は寢惚けたと見へ  
るな……と喧やくを聞き安藝コレ寢惚けるな早く來いと烈し  
き辭に驚ろきて主人の居間へ來て見ますると怪しき曲者を捕つ  
て押へて居る容体に暫し憫れて其側へ進み家來何か用で……  
安藝細を持つて參れ家來ハ……と聽て細を持つて來るを受  
取り彼曲者を高小手小手に縛しめ安藝此者を半へ押込め置け  
家來長まじりましたと引立て獄中へ押込みました茲にまた江戸表  
にては田村隠岐守殿は性質さ沈着にして辭は少く龜忽の舉動  
なき人で座います其精神が兵部少輔は頗ふる奸佞の白痴にて相後見  
であります其の精神が兵部少輔の差がありすゆゑに其交情も迷い

伊達大騒動

に心能からず思ひ居りましたが或時田村殿は兵部に對ひ彼れが  
諸事政道を取扱ひますに自儘の事多く我れを侮むる所爲屋々な  
る事を深く憎み彼れと共に居れば其罪共犯と相成るならんと思  
案致されまして田村貴殿と某し相後見の儀仰せ付られ台命重  
きがゆゑに不調法なる拙者止事を得ず勤め罷り在るが諸事我等  
に知らさず甲斐と貴殿の了簡にて國の政道を行なはれ給ふこと  
宜しからんか愚味の某し取るに足らずとはいへ是れ公儀より  
仰せ付られし所ろは重し然るを相成もなく致さるゝは公命を犯  
すの理なり故なく百姓に課役を掛け罪なき者を殺す等實專擅に  
政事を取行かばるゝは其意を得ざる儀なり龜千代殿のお爲を存  
じ斯くすず貴殿を勝るにあらす理風は先づ斯くの如きものであ  
りませう……と言れて其理に答へる辭もなく彼れは退出致しま  
した田村殿は彼等が成行きを見届んと是れより病氣と稱して密

伊達大騒動

かに政務を傍觀致されました邊に綱宗公に仕へました荒浪棍之  
助は荒木和助と改名致しまして兵部に仕へ居りましたが其年の  
七月廿日の晩方に芝の上屋敷へ來まして伊達所にて松前鐵之  
助に出合ひまして狼狽たる風情に相見へました鐵之助は心得難  
き彼が容体と思ひましたか答むべき様もありませんから何か仔  
細あるならんと思ひました居りましたが鐵之助は鐵門へ參つて  
門番に對ひ鐵兵部殿の家來荒木和助は伊達門を出たるや奈何に  
門番未だ下りませぬ……と叩て彌々既かり胸中に鐵彼奴めは  
先君に仕へ伊達側近く相勤めたるゆゑ伊達所の案内は能く知れ  
り元刻我を見て迷惑なる面色是れば定めし意味のある事ならん  
と思ひ伊達所の邊りに心を附けまして彼方此方を窺がひました  
が別に仔細もなき体なれば傍らに忍びまして八方に心を配つ  
て居りました既其夜も子の刻とも覺しき頃る伊達側板がメ

伊達大騷動

キくど音が致しました鉄之助は一刀の柄に手を懸け待かけま  
したを彼の曲者奈何か思ひましたものか庭へ飛び下り櫓の下へ  
身を潜めて居りましたたが限なき月の光りに透し見れば彼の曲者  
手に劔を抜きもつて叩へて居りましたを見済して同じく庭へ飛  
下り劔何者なれば操の下に身を潜めて居る此所へ出て勝負を  
しろと言われて彼れは曲者願ふ所の相手……と刀を投げ捨て  
無手と引組み双方劣らぬ大力量なれば地響きして暫し揉合ひまし  
たが松前が力量に彼奴を難なく組敷奪を取て大地へ押付け刀の  
下緒で纏り上げて面体を見ますに之れ別人あらず荒木和助であ  
り升から鐵足下が忍び入る事は我れ宵の中より知つて此所に  
待つとも知らず出来りしは幸ひなる證人なりと總て兵部殿田村  
殿方へ告げ知らせましたので兵部は直ちに來つて總て千代殿に對  
面致して兵部荒木和助儀は某し方を放逐したる奴然るに狼籍

伊達大騷動

を倒らく事定めて所存もいはん殿敷問致させます……と役人  
に付けて鐵之助は打笑ひ鐵然々な責方では全で子供の遊戯に均し定  
て鐵之助は打笑ひ鐵然々な責方では全で子供の遊戯に均し定  
めし之れには仔細あらん某し代つて責め呉れんと箒おつ取り力  
量に任して打据へました和助は苦し氣なる聲を發して荒木白  
狀致し升赦し給へ……と言ふ時神並三左衛門が茶碗に水を汲來  
つて三是を呑んで氣を落付けて白狀せられよと云れて其水を  
呑みますると忽ち悶へ苦しんで夥しく血を吐いて死ました此体  
を見て兵部は大いに怒つて兵部こりや三左衛門心氣取昇せた  
る者へ水を與へたるゆゑ死たるは汝じが不調法なりと呵り付け  
ました鐵之助は三左衛門が和助に水を呑せし爲体く奈何にも合  
點の行ぬ所爲なりと思つていよく油断なく殿敷守り居りました  
た……

伊達大騷動

兵部は我が屋敷へ歸りまして神並三左衛門を呼び兵部今日は  
 既での事に和助めが白状する所實に危ふき場合ゆゑ一服呑し  
 て大いに安心致したと金五十兩を與へました神並三左衛門は兵  
 部が容体を熱々窺ひますに不義不道にして少しも人の道  
 に適ひし事はなく彼の道益といひ和助といひ非業な最期を遂げ  
 たり最はや我が身の上及び事遠きにあらずるかして居て  
 殺されるのも馬鹿々々しいと思案致しまして或夜浴かに兵部始  
 め家人の寝静まりました頃豫て勝手知つたる小祠に封じ置き  
 ました連判狀其外密書の種類を盗み又納戸金二百兩盗み取り行衛  
 もしれず逃げ失せました兵部少輔は斯る事とは夢にも知りま  
 せんから三左衛門は只欠落ち一通りの事と心得まして別に詮索

伊達大騷動

も致しませんのは最はや悪逆の盡ます時節到來に及びました  
 もので座います三左衛門は道程九十六里の道中晝夜の差別な  
 く只管に急ぎまして僅か四日半に仙臺の府中へ着しまして脇屋  
 の城へ参つて門番に三某しは神並三左衛門と申す者安藝殿  
 へ目掛けて掛り直々に言上仕つり度儀之れあり江戸表屋敷より  
 罷り越しましたと申すは仔細あらんと思ひ安藝然らば是れへ通せ  
 ぬは考がへて其者は仔細あらんと思ひ安藝然らば是れへ通せ  
 ……と呼入れられ對面に及びました時に三伊人擲ひを願ひま  
 すると聞て安藝は家來共に對ひ安藝其方共は暫らく次ぎへ…  
 家來共へ…と答へて次の間へ退ぞきましたゆゑ三左衛門は  
 席を進み三此度某し突然に罷出ましたは餘の儀にもいはす兵  
 部少輔殿甲斐の兩人が巧みをした一大事を伊達進上ん爲めで  
 伊座りますと兵部甲斐が悪事を勤め奉つりしより私しと荒木和

伊達大騒動

助が伊達抱へになり先殿様の伊達致し吉原へ通はせ給ひし願末  
より近頃の毒薬を聞名させたる大場道益が事及び淺岡松前を罪  
に落さんどしたる事等を悉く述べて畢りまして纏て包みの中よ  
り連判状密書類を取り出しまして三是れは證據の爲に伊達目  
掛けまするが此外悪事は猶數多座いますかと言つゝ金二百兩  
の封金を取出して三私し此等の事注進仕つらん爲めに此金  
子を殊更に盗み取りましたは只欠落仕つりましては彼等後難を  
恐れ追人を掛けられんも圖られずと私えが賊心の者と思はせん  
爲に奪ひ取りました儀で慇懃に眼暗み逐電せしと安堵致させま  
した依つて此儘に貴君様に伊達預け申上げますと差出しました  
安藝は具さに聞て三左衛門が心底を大いに感服致しまして家來  
共を呼び厚く之れを讃應しながら彼密書の類を開き又連判状を  
見て大いに驚るき且つ歡喜びに堪へず安藝伊達當家の運の強

伊達大騒動

きゆゑに其方が返り忠のみならず斯やうも密書を得て密事を知  
らせし事賞するに堪へたり後日必らず此報ひは致す先づ休息致  
せよと懇切に挨拶致されまして家來柴田幸右衛門に三左衛門を  
預けられたまはした仍つて直ちに片倉小十郎始め元老智臣へ申  
ました仍つて兵部甲斐が惡逆露顯に付きまして伊達安藝が家來  
久世大和守殿へ對し訴狀を差出しました然るに伊達安藝が側近  
に藤井小三郎といふ者がありまして幼少の頃より安藝が側近  
召仕ました者ゆゑ心を許して密談の席へも給仕に差置きまし  
たが此者甲斐に語らば何なる恩恵を蒙りしやら甲斐の爲  
に心を盡し國元の密談等を辭細に書付けまして毎度江戸表へ  
知らせぬすので兵部甲斐は居ながらに安藝が家來眞田求馬伊  
忠なりと承知して居ます此度も密かに安藝が家來眞田求馬伊  
忠四郎の兩人を便ひとして公儀へ訴狀呈出の爲めに出立の事等

伊達大騒動

を具さに小三郎より告知らせましたので原田甲斐は兵部に對ひ  
甲斐此度安藝が家來兩人公儀へ呈出の訴狀を持參するよしなれ  
ば之れを途中にて奪ひ取り兩人の使者を打殺す訴狀呈出の妨害  
を爲すべしと聞て兵部も之れに同意致して豫て情けを掛け置き  
ました諸浪人村井喜左衛門水谷才助等を始めとして二十餘人を  
差向けました尤も五人宛彼方此方に隠れ忍び居りました  
然るに熊田甚五兵衛は此度彼の兩人江戸表へ訴狀持參の由を開  
き道中筋の事を案じ安藝に告げました熊田某し眞田求馬伊賀  
忠四郎と俱に江戸表まで罷越しすべし……と聞て安藝も熊田  
が注意を歡喜び同道にて出立致させましたが果して途中にて怪  
しき奴に出會ひました事は履々なれど熊田が剛勇に開怖して手  
出しも致しませんでした明日は江戸へ到着といふ日にあります  
と彼惡黨ども一所に集まりまして明朝是非とも討取り吳んどす

伊達大騒動

合せまして大川を前に今や遅しと待掛けました然るに此浪人共  
の内此間より彼の眞田求馬伊賀忠四郎の兩人を見るに天晴れ一  
我れ此間より彼の眞田求馬伊賀忠四郎の兩人を見るに天晴れ一  
騎當千の勇士と見へるに熊田甚五兵衛といふ剛勇の者加はり居  
ては我が浪人勢二十や三十人之れあるとも鳥合の臆病未練なる  
者どもあれば到底討取る事は扱て置き彼三人に研立られ可憐命  
を不義の爲に喪なはん事大丈夫の爲さる處るなりと見限りま  
して熊田方へ來つて如此々々内通に及びました熊田是れを聞  
て大いに歡喜び熊田此心底の程悉くし厚く謝して之れ  
を款待し拵て翌日熊田夜更の頃に宿を立つて大川の此方へ來つ  
て見渡しますに彼等は左右に別れ道を中にして待かけました熊  
田は此方より大音に熊田汝等ハ仙臺まで聞へたる伏兵ある  
かイテ片端から撫切りにして通るべし者ども進め……と呼はり

伊達大騷動

ました之れを聞て元來臆病の浪人共  
熊田を始め強い奴じやど一人り  
落八落に逃げ失せまして出會ふ者  
無事に江戸表へ着し右の訴状を  
宅へ持参して奉呈致しました扱  
て脱して熊田に自己が所存を述  
いへども其悪敷を知り身を顧  
の諸士には大分兵部甲斐に心  
一々知れざる事なし遣はし  
と思ひ早速安藝方へ仙臺の諸  
ば用ひ然るべしと申し遣はし  
附け居りました然るに或時密談  
の折柄安藝は用事あつて其席を

伊達大騷動

立出んとする時藤井小三郎が懐紙に細字をもつて何事をか書  
ためて居りましたが安藝が姿を見るより周章して喰ひ裂き灰吹の  
中へ丸めて入れました安藝は既かしく思ひまして殊更に會合を  
聞き人々の心底を探りましたが別に是れを思ふ者一人もあり  
ません安藝は用事あつて彼の小三郎を呼びますにその答へ襖に  
響きましたゆゑ道はるの音聲の容体正しく立聞したる事を知つ  
て人々を返して後ち彼れを呼寄せまして安藝其方は我家の  
隸なれば幼少の頃より情けをかけて召仕ぬしに汝は何の恨みあ  
つて我れに背き逆徒に與し六十二万石の大事を妨たげんと致す  
か人面獸心といふは其方なり速かに本心に立歸り我謀計に隨が  
ふべし面てを和らげまして諭しますと小三郎恐れ入りました  
斯く淺ましき事をば覽なされ何んの面目あつて主人に仕へ奉  
つらん千悔するとも今は益なく何卒涉情けにははやく頭を刎ら

伊達大騒動

れ下さるべしと聞て安藝は安藝今我が好み次第に一書を認た  
めるか 小三郎長こまり奉つり升と答へて 安藝然らば是れを  
書け其文に安藝は我意を振ひ人々を侮せりしゆゑ片倉小十郎是  
れを憤り遣恨強く不和に罷り成り只今にては安藝も詮方なく  
相見へ近日何れへも和睦致し訴状も願ひ下げに仕由に伊座  
其他の事は後便に申上ひ云々認めさせまして兵部方へ送ら  
せまして後ち小三郎を引出し 安藝其方儀不懲には存すれども  
主人龜千代君を妨ぐる族と一味せし事我に不忠とはいへ主君  
へは此安藝が不忠なれば私しに助け難し是に依つて刑罪に行な  
ふ我等一分の事ならば助け得させんれども重き事なれば斯く  
の如し……と終に首を刎ました切て此藤井が書翰江戸表へ到着  
致しましたゆゑ兵部は是れを披見して大に歡喜び早速原田甲  
斐に藤井が書面を見せました甲斐は眉を纏めまして 原田道は

伊達大騒動

小三郎が直書に相違なしといへども彼れが我々に與せし事露顯  
に及び安藝我々を欺むかん爲めに小三郎に認ためさせしものと  
覺ゆ其文意と筆勢にて之れを察したり……と言ふ流石逆徒の首  
領で伊座います切ていよ訴状の趣き上聞に達し對決に及ば  
んとするゆゑ酒井雅樂頭殿より兵部を招き給ひ如此々々の事な  
れば答の趣き甲斐と相談あるべしと内達がありました兵部は驚  
ろいて早速に立歸つて原田に此事を相談に及びましたが少しも  
騒ぐ氣色もなく 原田斯くなる事は豫て思ひ設けし事にして今  
更驚ろく事なし其節に貴公は何も存せざる旨を答へられて某し  
へ譲り給へば某し罷出で、智辨を振ひ安藝を言伏ん事最と易し  
……と聞て兵部は聊か安堵致しましたが二月九日伊達安藝は江  
戸表へ到着致し此旨は老中へ届けに及びました甲斐は兵部に  
對つて 原田對決も近日にありませうが過日やした通り臨機應



伊達大騒動

謀の謀計をもつて安藝を言伏ん事叶ひ難へば其時某しと安藝の  
相拷問を願ひは安藝は老人なれば責殺されん事疑ひなし依  
つて酒井殿へは差圖之れある様に内密にて願ひ置きなざる  
べし此願ひ相叶ひ相拷問を仰せ付けらるゝに於ては容易く安藝  
を亡ぼすなりと聞て兵部は雀躍りして歡喜ひ潜かに酒井殿の館  
へ参り委細合せますと酒井殿は酒井安藝が方に連判状など  
所持の由何者が盗み出せしや此事詮議あるべし又老中の面々  
罪に恐れて對決に及ぶまじ併し板倉内膳一人其心底知れ難し先  
づ内膳は未だ新役なれば其方懸念には有まじ此度の邪魔になら  
ん者は只内膳一人なり依つて内膳方へ賄賂をもつて取入さば世  
に恐るゝ者なし宜敷計らはれよ……と聞て兵部は急いで立歸り  
まして先づ密書類を檢たりますに更になし又納戸金二百兩紛失  
して居りますから顔色土の如くになつて急ぎ原田を呼寄せ如此

伊達大騒動

如此と告げました甲斐は聞畢つて原田道は皆神並めが所業  
なり外に疑がふ所なし併し安藝方に證據多き程相拷問を願ふ  
に便利宜し……と言つて驚ろきたる氣色もありません乃で板倉殿  
の内證の手筋を聞き出しまして原田は御内々に目見願ひ奉つり  
度といつて内膳正殿始め家中残りすへ過分の音物を送りました  
板倉殿早速に内膳正殿に届けに相成りまして賄賂も受納されま  
斐は内膳正殿の御下城を伺がひに立關に至りまして案内を乞ひ  
ます公用人村井甚太夫出迎へまして村井只今主人内膳正下  
城仕つり能折柄に之れありませぬ内膳正殿に對面あつて甲斐に  
廣間へ到りますと暫らくして内膳正殿に對面あつて甲斐に  
雅がありました甲斐頼首致して原田私し主人能千代儀未だ幼  
者の恐れを願はず目見願上げ奉つり升ると聞れて内膳正殿最と

懇切の詞なるゆゑ甲斐は種々の事を辨に随せて上げました  
板倉殿は篇と聞濟し給ひ板倉凡そ武士道は非道を糺すの役な  
り故に非道をもつて武道とせば武に亡ぶ徳ありとは言難し扱て  
依怙最負は媚諂ふ佞人輩が致す事なり將軍の老中役は一々四海  
の鏡面なれば職氣ある事は致し難し又善と悪とは訴ふる人あつ  
て時の役人の仕業にあらす其黑白を見分けて悪しきを戒しめ能  
きを賞美するは我々が職分あり又賄賂する事之れ商人杯の業に  
して更に武士道にあらす懲りに引され其職を忘れて賄賂を受けるは  
小人の常にして取るに足らず甲斐其方は何人の家來かと問れな  
ば定めて龜千代が家來なりと言ふならん主人の爲に賄賂する事  
すら宜しからぬに身の爲にする賄賂八千石の知行にて斯る大金  
を遣ふ事甚はた不審の至り道は併しあがり内証なれば予れ聞ぬ  
分に致さん罪ある人を罪に落すは至當なり理非は評定所にて予

す可し此間の送り物は返却すゆゑ持参すべし……と云つゝ一  
家中の音物を取集めまして甲斐が面前に積ならべさせました流  
石の甲斐も惣身に汗を流し最と面目あげに板倉殿の役宅を退  
予きました必竟之れより安藝を毒殺なさんとする兵部甲斐等の  
奸計の一段後席に辨じます……

第十席

伊達安藝は龜千代君の健康かには成長遊はされしを歡喜びまし  
て其日より長屋を取繕ひまして之れに住居ひました持せ  
其外湯茶までも悉く用心して淺岡が奥より調のへまして持せ  
送りましましたそれゆゑ兵部甲斐の兩人種々密談を遂げて其便宜を  
窺ひ居りましたが茲に足輕小頭に木戸彌兵衛といふ者があり  
ますが其娘當時勢ひのある今村善太夫方に奉公致させまして今

伊達大騒動

年十一歳になりす又彌兵衛の女房は若年の時安藝が方に永年勤めました者ゆゑ安藝が到着の日より勝手へ参へて勤め居りま

伊達大騒動

方が一言にて娘の命は風前の燈火よりも危ふし……と言つゝ娘を呼出ししました彌兵衛は驚ろき彌兵衛は兎も角私し儀は異存

伊達大騒動

ましたに飛んでもない事いかな事... 思を受けました安藝殿なれば... しますが折様の事は思ひも寄らぬ... さいませと言つてなかく合點す... 纏て娘を呼出し置き原田汝に... 非に及ばん今汝に目の前にて... 殺すから左様覺悟致せ... 口先ばかりでは濟ぬ其印ある... 預り置くぞ先づ之れへ血判致... を注ぎまして毒薬一服受け取... 安藝の許へ参り機會を窺ひ取... 食物は皆さ淺岡が方より運び...

伊達大騒動

依つて甲斐が所へ参つて毒害の行なひ... けますと原田然らば水になりとも... 細々と都合めました安藝はその翌日... して龜千代君の此前へ出まして未... 煖たれ食事の爲さんとするに不在... みを置き一滴の水もなくなつて居... を呼び水を求めました彼女が水を持... 見へますゆゑいよか茶瓶に其水を... ますと湯氣が天井に立昇りますと... な陽氣でありますから少なき虫が... からバヲと落ちては死す容体安藝... 安藝乃公が留守に火も無いに茶瓶... 細かな虫の死したる事といひ其方...

伊達大騒動

細があるであらふ汝も知る通り此所へ来る者は汝一人りじや  
他人の来る筈がない……水の毒味を致して呉れ……と言れて彼  
女は赤面して答へなし安藝は元より寛仁大度の人でありませうか  
ら物も騒がぬ勇士なれば徐かに安藝コレ定めて甲斐に頼まれ  
て慾心に引かされし事ならん真直にせしめを言はざれば大事  
に及ぶ奈何にと問れて彼女は涙を流し包み兼ねて有の儘  
に如此々々と語りました安藝は聞畢つて安藝汝も等事を得  
ずして斯る悪事に組みせしといへども是れ天命に背きしゆゑに  
忽ち顛はれたるものだ此安藝は生れながらにして君へ二万五  
千石に賣つた身なり之れ我身にしてみれば自ら慢するにあら  
ずは六十二万石の浮沈安藝が一身にあり我身を自慢するにあら  
ざれと實に重き我身なり恩を知らぬ愚人の力に及ぶ事でない……  
と言聞せまして驚て爾兵衛を呼寄せ夫婦ともに押込め置きまし

伊達大騒動

ていよいよ用心に油断なく致して居りました茲に品川の下屋敷  
に幽閉致されます綱宗公即ち隠居可信翁に於かせられまして  
は安藝が遙々出府して龜千代の傍を思ひ忠節他事なき容体を  
聞給ひ最と感心の餘り殊に近日公儀へ召し下さるゝといふので  
何卒安藝が勝利を得る様にと思し召身は他出も叶はざる傍身  
なれば筆を取り給ひて兵部其外倭悪の輩が悪事を一ツ書に致さ  
れまして安藝が方へ送られました其書に  
此度其方到着の由別て太儀に存し夫に付き兼て龜千代の爲  
を存じ其段公儀へ寸違せられぬ由誠に忠義の至り此事なり  
然る上は何分にも無難の儀思慮して龜千代成長致し様萬事  
其方に任せ頼み入ゆ乍去兵部事は雅樂頭殿へ親敷いへば奈何  
様の調儀有之べくや其方油断有間敷いへども心元おくは近  
年兵部甲斐一味致し我意言語同断の事なり哀れ對面の上ヤ

度事多くいへども心底に任せずい心得にも成るべくと存じ  
兩人の者ども邪の仕置思出し次第逐一に別紙に書付遣し  
隠居の身今更無念の至り心底察し可給い不宣  
二月十二日  
猶々久敷逢やす床敷存い兎角朝夕の苦勞筆紙に盡し難く  
以上

別紙

一 近年兵部甲斐と相談の上にて敷政道餘り乱れい故我方より  
益田小左衛門帖貝頼負とす者をもつて段々宜しからざる儀  
共左様にては龜千代爲にも悪敷いと遣しい處兵部甲斐方  
より返答に隠居致いはい後生の心掛け尤に現世の事は某  
し甲斐有之いへばいらざる世話事にい畢竟手前の不行跡に  
引就べ某杯も左様かどの思し召馬鹿者の真似致い事罷成り

一 中さすい以後は隠居より掛立無用にい尤上屋敷は勿論麻布  
深川等の中屋敷へも慰みに罷出い幾無用にいと散々悪口に  
及い賊とに口惜き事言語同断にい  
一 何の故もなく益田小右衛門帖貝頼負の役儀取上い依之我等  
方より此段遣しいへば兩人倭奸の者にい隠居に付置いて  
は奈何様の悪事を企てやすべくも計り難くとすいに國許へ  
押込い是は先頃異見を致遣はしいを憎みいと存じい  
一 風聞承りい處逃判状を拵らへ徒黨を催しい様承りい  
一 某し隠居座敷の事兵部甲斐計らひとして獄屋同然に修理い  
差置尤も事に及いはい我等を刺殺しい様にとの下知致  
し由秋保平八とす者より聞及い  
一 隠居の砌りには禁酒に定めい處去る頃渡邊金兵衛とす者方  
より美酒の由相贈りい我等禁酒の處へ酒を送りい事不審に

伊達大騒動

存じ召仕の者に毒味致させし處即時に死すし畢竟某しを毒  
 酒をもつて片付けし積りに相見へすし世にもなき者相果す  
 以事は苦しからずし得共龜千代の爲め家の爲め一方ならず  
 我往日の不行跡今更後悔に  
 一 今村善太夫横山彌次右衛門濱田市郎兵衛志賀右衛門四人の  
 者ども罷越畢竟我等不行跡世間の取沙汰今もつて宜しから  
 ずし聞了箇も致しへど濱田玄蕃に毎度噂致し由口惜き事に  
 一 兵部甲斐毒薬をもつて龜千代を殺さんと相企てし所鬼役の  
 者試み致し相果てし是詮儀有べきの所る兵部早速に願付驚  
 きし体にて料理人其外龜千代側にて召仕し女ども八人即時  
 に切殺ししし尤も何の諺も相知れずすし  
 一 其方罷登りしを迷惑に思ひ我等自筆にて書ことを止めし様

伊達大騒動

斯くの如き毒状を濱田玄蕃に持せて安藝が方へ遣はされまし  
 を此毒至つて愚味の者ですが甲斐とは少しく縁者にて殊に服  
 心の者でもりますから途中にて潜かに封を開き見て大いに驚ろ  
 き直ちに甲斐が方へ持行きました所る折しも密談して居りまし  
 たゆゑ彼の書面を見て奈何せんと言儀を致しました甲斐は思  
 案して原田幸はひ某しが近士の内に澤井勘兵衛といふ似せ筆  
 に妙を得たる者なれば隠居の手を似せさせ安藝を隠居に呵責ら  
 せ仙臺へ道ひ返さん若し薬下らずは隠居を恨まん之れ反箇の謀

度々催促致し朝暮渡邊金兵衛罷越相改ためしに困り果すし  
 尤も此外にもす遣はす事數多しへども事急に認めしゆゑ  
 斯くの如くにも以上

品川幽閑可信

伊達大騒動

計なりとて偽書を認めさせました其文に  
其方儀何とて登りしや言語同斷不届きに先達て不承なる  
儀を申立しには仙臺にて沙汰に及ばざる所是を願り見す  
公儀へ訴状を差出しし條承り及び第一上を憚らざる儀重  
く不届に申上の上龜千代幼少にへは家中の仕置兵部甲斐  
等心を勞し政道を行なひゆへ今程に國元も目出度治まり  
龜千代も無事に成長致ししへは家儀昌勿論に罪なき者を  
罪に落しよしなき事を申立し事其意を得ずし説者の言を信  
じし半と致しは忽ち不運に陥ちゆく兵部甲斐に何  
の申分是あるや合點參らすい早々國元へ罷歸りし様致すく  
い老中へも申譯は此方々申達すべく世間に沙汰無之内に  
早々國許へ罷越し儀尤の事にい

二月十二日

可信隠居

伊達大騒動

と書ました聖色筆法隠居の手跡にす分違ひませんから歎喜んで  
玄菴に渡しまして安藝方へ遣はしました安藝は隠居の書を取  
鑑して百拜致して後ら開封して見まするに存外なる文章なれ  
ば大いに驚ろき且つ恨みまして安藝斯く淺ましきは心底こそ  
海情けれど返書にも及ばず打捨置きました綱宗公は安藝が返  
書なきを疑がひ給ひて秋保平八を遣はされまして其容体を探ら  
せました平八は安藝に面會致しまして彼書の内容を尋ねますと  
その書状を平八に讀聞せましたゆゑ驚ろいて其文章を寫して立  
歸つて綱宗公に読覽に入れますと公は驚ろき給ひ綱何者が此  
偽書を推らへしかと怒らせ給ひて人を走らして安藝に告げ知ら  
せ給へば安藝事既に近きに定まるに依つて佞奸の徒薄氷を踏  
ひ思ひをなし居る時にて今偽書を檢ためては事の破れとならん

安藝のへ



彼等叶はざる事を知り奈何なる變を生せんも計られず暫らくは  
堪忍然るべし……と申送りましたので綱宗公も道理と思し召れ  
まして其沙汰にも及び給はず其儘に致し置れました……

第十一席

伊達安藝は前述べます如き次第なれば綱宗公の此身の上を氣遣  
ひまして或時熊田甚五兵衛を呼び寄せまして安藝某し然々思  
ふに彼の源田玄蕃が綱宗公の此書翰を引替へたる事といひ先君  
の傍身の上甚はだ心許なし依つて其方先君の此身に隨がひ萬事  
物毎に心を附けずさるべし……と聞て熊田某し思慮を廻らす  
に悪徒ども貴殿の訴へを苦敷思ひ奈何なる巧みをなさんも計り  
難し依つて貴殿の影身に隨がひ奸賊等の難を避けずべし又先君  
の事大切は言ふまでもなし然しながら只今にては貴殿には替へ

伊達大騒動

難し伊達家の存亡此時なり某し貴殿に隨がひ危急の場合には命  
に替らん之れ貴兄の替りに一命を捨るなりと聞て安藝拙者も  
武士なり逆徒の奴輩何事を謀るとも然のみ氣遣ひはあるべから  
ず只先君の事を思ふ事願りなれば訴たへに臨むといへども心  
に掛るは此一事のみ幼君の傍側には松前鐵之助あれば氣遣ひな  
し某しが辭に隨がひ心を安めさせられよ……と聞て甚五兵衛も  
道理と點頭さまして熊田然らば是れより品川へ罷り越しす  
べしと暇を告げて出で往きました下屋敷の館へ往つて秋保  
平八に對面して綱宗公へ傍目見致しました鬼を欺むく如き甚五兵衛の手  
を取つて傍落涙に及ばれましたので鬼を欺むく如き甚五兵衛の手  
す涙をハラハラと溢しませして熊田道は有難き仰せを蒙む  
る併し安藝が忠誠の事を見るに一々擧げて敷へ難くいへども下  
僕が身は如此々々にてと安藝が出府の道中の事等を上げ又松

伊達大騒動

前鐵之助が忠義の働らきを上げました網宗公聞給ひて 網家  
中多き人の中に汝等三人何とて斯程に忠臣なりしが予れ情弱  
にして國を治むる事能はず斯る忠臣あるとも知らず過したるこ  
そなたてけれ譬へ今宵の内空敷なつて黄泉に趣ひくとも汝等  
が志操は生々々々忘れまじ……と感激し給ひ暫し涙だに暮れ給  
ひ稍あつて 綱手斯る忠臣を持ながら今通塞の身となれば心の  
儘に恩賞も興へ離しと宣へて熊田が膝に手を置き給ひ 綱我が  
命も今日か明日かと思ひしに熊田に逢ふて生たる心地なりと歡  
喜び給ひ或ひは歎き給ひし容体見るも痛はしく熊田は承は  
り涙だを拭ひ 熊田は道理千萬に存じ奉つります甲斐は江戸表  
の惣奉行として萬事役人に附半獄に均しき此は住居は勿体な  
し先づは既感易く思召れよ某し側にあれば佞人輩が鹿忽の  
振舞致させまじと最と深よき彼れが辭に網宗公は心ろを安す

伊達大騒動

んじ給ひしは然もありませう然るに甲斐直則は古今の英勇傑  
にして實に逆徒の首領と言つべきものでありますから種々に奸  
計を廻らし品川の屋敷へ忍びを入れて密かに網宗を殺害するな  
らば其詮議に掛つて訴たへの事は臆になるべし若し行かばれて  
も知らぬ風態にて公庭に臨まば此方より詮議してその咎めを課  
せる思案あり兎角跪かせ迷惑させんといふ巧みにて濱田玄蕃を  
招き寄せて 原田綱宗の熟く睡り給ふを見濟して只一太刀に差  
殺すべし……と聞て 玄最う少し以前ならば容易く殺すべかり  
しなれども昨日より熊田甚五兵衛を安藝の方より附けられたれ  
ば到底も叶ひ難し……と聞て 原田南無三寶又安藝に先を越さ  
れしか扱々意恨限りなし彼奴生置ては我等が大望の妨たげ速か  
に安藝めを討取りたし……と聞て 玄イヤく彼れが家來に中  
野左太夫といふ剛勇の劍術者がありませす必らず短慮を起し給ふ

伊達大騒動

な彼左太夫めが側にある内は何とも致し難しと制めされた儘て  
伊達安藝は先達て願書を差出しましたのが今又綱宗公より告知せ  
給ひし七ヶ條の悪事を書きたりたへ出でましたのは寛  
文の十年二月廿五日で座います之れも板倉内膳正殿方へ差出  
しました内膳正殿之れを受取り給ひ久世大和守殿と申合されま  
した時大和守殿は久世兵部子息市正は酒井殿と野男の好誼あ  
れば裁許六かしからんと存じますすがと聞て板倉各々も某しも  
忝しけなくも將軍の目代として日本國中の政道を預かり奉つ  
り邪正善惡を私すの職分なり政道の事には親疎決してあるべか  
らず銘々親類縁者の好誼は之れ私し事にして公やけの沙汰にあ  
らず其私しに關係り善惡を糾さずんば天下の政道棄れずすべし  
……と仰せられしゆゑ大和守殿然として詞なし仍つて内膳正殿  
より酒井殿へ差出せられたので止む事を得ず評定に及びまし

伊達大騒動

た扱て二月廿日伊達安藝宗重評定所へ喚出しになりました  
列席の順序は正面に伊達大老酒井雅樂頭忠清朝臣左右には伊達中  
稻葉美濃守正徳朝臣久世大和守廣之朝臣土屋但馬守直朝臣  
用番新役板倉内膳正重朝臣又若年寄には土井能登守利房朝  
臣永井伊賀守忠利朝臣本多長門守尙康朝臣戸田伊賀守忠義朝臣  
大目附高木伊勢守殿黒川丹波守殿の両人又伊賀守に大井新  
左衛門殿妻木彦右衛門殿は徒目附等まで居流れては出席で座  
います扱て伊達安藝より差出しました二通の訴状をもつて一々  
其尋問になりまして然るに安藝が陳述に一點の疑みもなくして  
内膳正殿は安藝が少しくも詔ひ飾る事なく滔々述べて思召れて  
板倉殿は安藝が少しくも詔ひ飾る事なく滔々述べて思召れて  
の懸の如く其休総の如くあるを恐れず其の大勇とは彼れをや

伊達大騒動

やさん……と賞美せられて酒井殿の面を倍と見給ひしかば酒井殿は最と不興氣の体にて御座を立れました。同日廿五日再び此日の評定は是れまでにて一同退散致されました。同日宗勝の両人を評定所へ召喚に相成りまして鑑て尋問になります。安藝が陳述一答の巧みなる事なく正直の訴へであります。から伊達兵部内膳正殿は兵部に對ひ給ひ板倉こりや兵部只今安藝が訴へし所ろの訴状一々覺へおらんや立てられよ。兵部某し毛頭存じし所ろに伊達原田甲斐こそ委しき事情は存じしはんか……と陳べます。酒井殿は聞給ひて酒井最早其許に尋ねの趣むき之れなし直ちに退出致すべし……と申渡されましたので兵部は歡喜んで早々に伊達を退出致しました時に内膳正殿は伊達膝を礎と打ち給ひて板倉

伊達大騒動

事既に極まりたり……と申されすを大和守殿久世奈何して其善悪を知り給ひし予板倉されば毒薬をもり罪なき者を殺さんとするものは誰と加する然るに叶はざるに及び其罪を他へ譲らんとせり善悪既に愛に現はれたり……と申されました。酒井殿は聞かれて最と不快なる面色にて退出せられました。翌廿六日原田甲斐直則を評定所へ召喚になりまして安藝が訴状をもつて尋問になりました。甲斐は委細に承はりて原田龜千代後見の儀田村隠岐守伊達兵部少輔の兩人へ仰せ付けられ其上江戸詰某一人に定められし體へにも高木は風に憎まるゝの習ひにて近年隠岐守儀多病に依つて政事専ら兵部と某しが取行なひに之れに依つて人々の其過失あらん事を危ふみ百慮の一失なきにあらす程弒逆毒殺の事なと企てます。臣等が聊か存せざる所るに凡そ我々に不審の志ざし是れれば家中一統に存すべき筈

伊達大騷動

なるに安藝一人が某し等の罪を訴たへ台聽を驚ろかし奉つる事  
懼りながら賢慮なし下されたく……と述べました雅樂頭殿此  
時高座にて酒井安藝最負の人は此訴へに赤面する人もやあら  
ん……と仰せに大老の權威に恐れしか誰一人詞を出す人もあり  
ません時に板倉内膳正殿進み出られ板倉遣は涉大老の仰ども  
覺へぬはす天下の政事を扱ふに理非明白に心を掛け假初にも  
最負偏頗の事なきをこそ職と心得いに此席の内に誰人か最負偏  
頗の輩ら之れあるべきや天下の邪曲を札すべき身をもつて身に  
邪道を行なひ或ひは時の權威に依つて下を蔑し自己が心の儘  
に事を行なひ自己に諂らふものをば助け自己に疎き者を罪に落  
さんとする者をこゝろ天下の大罪人なりと言ながら雅樂頭殿の方  
を見やり給へば酒井殿も辭なく白け渡つて見へました此日は甲  
斐が返答ばかりにて各々退出になりました扱て三月十日に相

伊達大騷動

成ります伊達安藝と原田甲斐の兩人を左右に召出されまして  
對決仰せ付けられました役人は例の如く堂々と居列び給ひ伊  
達安藝は少し進み出でまして安藝其方先主綱宗の時に主君に  
婚酒を勸め奉つり悪所通ひを諫め奉つらず其上男立とやらん者  
を召抱へば身持放埒にあり給ひしは皆之れ汝じが爲せし業なり  
奈何に……と聞て原田先君淫酒に長じ給ふ事愚臣心を盡して  
諫め奉つるといへども決して用ひ給はず悪所通ひの儀は聊か某  
しが興り知る所ろにあらす安藝直三平中村四郎左衛門等罪な  
きに或ひは手討にして又は跡罰に行なひ給ひし時汝じ何ゆゑ諫  
めざるや原田中村四郎左衛門手討の事其座に居合されば是  
非なし又直三年事は某しを退すけん願ふゆゑ某しも退ぞかん  
ど乞ふ然れども主命敢て免されざれば三平却つて不興を得たる  
の罪は其身の不幸にして何んぞ某しが業にいはんや……と答へ



伊達大騷動

を進み給ひて板倉奈何に甲斐……其方に陸奥守が重器を預け  
ん然るに人の爲に之れを盗まれしに汝は盗人は某にあらす某し  
存せざる所なりとすさんに汝に罪なしと人は是を免すべきか況  
してや幼主龜千代を補佐するの任大切なり何んぞ器物と均しか  
らん……汝は國政を預かりながら其主の乱行を諫めず龜千代の  
側に悪人あるを知らず自己が身の過失を言償はんと致す其不忠  
の甚だしき是れに過たるはなし……と理非明白にすされました  
流石の甲斐も差俯向き暫し答へもありません時に安藝は甲斐に  
對ひ安藝奈何に甲斐伊達式部と某しに恨みを結ばしめんと謀  
計又小十郎と某しが間に害心を起さしめんとし刺客を入れて某  
しを殺さんと計り玄事皆之れ汝は企てなるべしと聞て原田  
足下式部と谷地の争論は家の騒ぎと成るべき事を思ひ兵部及び  
大道寺幽庵渡邊金兵衛等と相談の上取扱ひたれば某し一人の計

伊達大騷動

りしにあらす又今村善太夫志賀右衛門横山彌次右衛門濱田市郎  
兵衛等四人の者へ中附けたればその善惡某し一人の罪と定めん  
や又小十郎方へ忍びを入れ貴殿を殺せんと儀某しが所爲と  
訴へらるゝ間暇あらんや必竟之れ某しを罪に落さんとてか但しは某  
入るゝ間暇あらんや必竟之れ某しを罪に落さんとてか但しは某  
しが職を偏執のゆゑか苟くも伊達家の恩を蒙むる事大山の重き  
に均し朝暮心を勞し其恩願に報ひん事を思ふ然るに佞人徒黨  
の賊あつて僅かに偏執の事より起つて君家を動乱なさしむる之  
れを忠とや言はんか將た不忠とせんか……と辨舌滔々ど水の流  
るゝ如し此時安藝は甲斐を見やりて安藝汝は辨佞をもつて其  
罪を覆ひ隠さんとすも餘人は知らず争で某しを欺むく事を  
得ん式部と某しに遺恨を結ばしめんとせし事の明白なる證據あ  
りと懐中より一通を取出して妻木殿に奉つる其文に

一此度谷地見分の事先達て三分一は式部殿三分二は安藝殿へ  
との事に座座の處彼谷地見分の時は必らず式部殿へ三分二  
安藝殿へ三分一の割合可致旨伊達兵部少輔殿原田甲斐殿  
兩人の差圖にて座座の右非道の見分私共の計ひにては無座  
座以上

月 日

今村善太夫判

横山彌次右衛門判

伊達安藝殿

と高らかに讀給ふ時 安藝小十郎が家來と言せ某しを討んとし  
たる由者は生捕置きました何時にても對決致させます……と  
言つゝ甲斐に對ひ 安藝汝と先君を酒狂に導ひき臣として君を  
疎ましむるは深き企謀あるゆゑなり終に先君を落し入れ猶ほも  
他足らず幼君をなきものになさんと計る其一人は死を遂げられ

と今一人汝に見すべき證人あり前名は鳴神峰右衛門只今まで汝  
等が腹心たりし神並三左衛門此者既に汝等が密事を明白に告げ  
たり之れへ呼び出して見すべしと聞て甲斐もハツと思つたが元  
來不敵の者なれば少しも騒がず 原田其三左衛門は罪あつて死  
刑に行なはんとせしが扱は仙臺へ送げ仰ひわらぬ事を喋りし  
と見へたり狂人の詞信するに足らず……と言ふ折りしも役人  
中より三左衛門を呼び入れんとありましたが既に黄昏に相成り  
ましたゆへ今日の對決は中途にて一同退散致しました……

第十二席

扱て三月十日の對決双方是非の分明ならざれば同十六日例に依  
つて酒井雅樂頭殿御役宅へ召喚になり諸役人出席に相成り  
まして伊達安藝は甲斐に對つて 安藝先日もやす通り神並三左



伊達大騒動

術門に限らず益田小右衛門鮎貝鞠負等も悉く汝等が悪逆を知  
り某しに傳ふ然るに辨舌をもつて理を非に曲んとする條卑怯未  
練あり……と聞て原田某し思ふに仙臺に元老智臣汝一人に  
らず然るを汝と一人是れを扱ふて謀書を造り奸人を語らひ某し  
を罪に落さんとするは其意を得ざる所なり此儀を扱かふ事深き所  
振つて争そふども某しが一人抽んで此儀を造り奸人を語らふと  
あつてなり汝等が知る所ろにあらす謀書を造り奸人を語らふと  
は其方が行なふ所ろにして何んぞ我れ是を知らんや今一人の證  
人を今出して實否を糾し見る……といふ時雅樂頭殿酒井安藝が  
只今の中譯け立難し甲斐がやすく安藝一人此度の儀に専ら取  
扱ふ容体甲斐一人に意趣を合むと相見へる但し他に述る事ある  
やと云れて甲斐は笑みを含みて居りました安藝某し此儀をい  
なやとやすにいはす然れども列公の傍耳をそばだてられんは恐

伊達大騒動

れ多く差扣へ居りました此一事に付きは不審相蒙むりいはい  
に延し自己が理のみ事こそ不届きなり剩さへ上を計りい係奇  
怪なり云ふ事あらば速かにやすべしと言れて妻木殿に對ひ安  
藝千萬恐入りい得ども然らば上いはん抑も此度の訴たへ全  
く某し一人の偏執をもつて中上い儀にては座なく既に此一事  
仙臺譜代の者ども誰彼と事を起さんどすい然れども若輩の族大  
願の殿命なるを恐れ又尊廟の概なるに怖れす上い事も覺束なく  
其上甲斐は老功の者にいへばいかなる巧み或ひは辨舌に言或は  
されん事を恐れ差扣へい尤ども家中一統して願ひ奉つるべきな  
れども公延へ對し奉つり徒黨がましく相聞へ後難を恐れ遠慮仕  
つり某し一人此事に關かり且國元の儀政事萬端宜しからずの  
儀訴たへ空敷に似たる儀は當時一天下の間雅樂頭殿仰せとあれ

伊達大騒動

は風雷の如く驚ろき恐れ其の上兵部宗勝の子息市正儀は雅樂頭殿  
に縁者たれば兵部等政道の儀に付き善悪とも雅樂頭殿より  
差圖と承はり其故は何れの書何れの下知にも忠清公の仰なり  
と申越し既に此の間會覽に供へたる書にも如此々々之れあり升  
る此ゆゑに兵部甲斐が惡事を訴へたへますれば取りも直さず雅樂  
頭殿の仰せを背きたる様にして役人衆中にも一先差扣へ然る  
べきとの事にて傍取上げも之れなく空しき体に相成りまするは  
此列席の政方様へ對し奉つり恐れ多く差扣へ罷在りしへども萬  
止む事を得ずして此度の訴へに及びましたる次第に座宜  
敷く賢察あらせられ公明正大の御裁許偏へに願ひ上げ奉つりま  
すると懼かる所なく述べました雅樂頭殿は額に汗を流し酒  
井何んぞ某しが差圖をなさんやと申されましたのが最と苦々  
しく見へました時に神並三左衛門をお呼び込みになりました

伊達大騒動

安藝此者こそ甲斐が腹心の者に之れありまする傍證願ひ奉つ  
りまする……と言ふ時酒井アイヤ對決は兩人の身の上になり  
何んぞ他人を交えん理分あらば人の力を借すとも汝じが心に  
ある事なれば餘人は罷り成ん……と聞れて内膳正殿板倉對決  
の理非たるは根を断ち葉を枯らす如く明白にするをよしとす體  
かなる證據あらば幾人にも出すべし内膳が許す予……と宣ひ  
ました甲斐は三左衛門をハツタと白服み原田汝じ四夫素性賤  
しき身をもつて我前に出て何事を言んとするか兵部の恩を荷ひ  
情けを蒙むひるの道に忘れ却つて我々を罪に陥さんとするや其所  
退り居ふ……何り付けますと三左衛門何々と笑ひ三奈何に甲  
斐殿貴所は奈何様に陳しても某しが出たらば最早遁れぬ抑も大  
場道益同宇右衛門荒木和助等は兵部殿貴殿の兩人にて取立つて  
思賞も厚かりしに首を刎られたるは之れ貴殿等が隠謀の顯はれ

伊達大騒動

ん事を愁ひて罪なきも殺されたる此者どもが身の上を見るに危ふ  
き場合に命を捨てたにもあらず又恩を感じて死したるにもあらず  
只貴殿等が隠謀の餌になつて欺ひかれて死に及ぶといふは彼等  
も悪に加擔した罰だ依つて悲々我身の上を悔ひ始めて無明の眼  
りを露した然れども汝等倭奸邪智ゆるいか成る謀計をあさん  
知れされば懺かなる證據をもつて老臣方に訴たへんと逆徒一味  
の連判状と毒藥調合の密書まで悉く盗み取り外に金子二百兩  
を奪ひ立退きたるは追人の掛るを恐れての某しが手術其金は包  
みの儲に安藝殿に預け置いた何うです最う争ふ所はありま  
すまい……と言れて甲斐は當惑の体其時安藝は三左衛門が差出  
しました二通の書を書き木殿へ呈しました内膳正殿之れを朗讀さ  
れました

相渡し一札

伊達大騒動

一 此度伊達曹子龜千代殿毒害の事首尾調し上は心恩として其方  
に三千石同姓宇右衛門へ二千石無相違宛行なふべき者也  
寛文七年九月廿五日  
甲 斐判  
兵 部判

大場道益老へ

願入一札

一 恐びの術尾首仕り龜千代殿於殺害者三千石宛心恩として宛  
行ふもの也

寛文十年七月十五日

甲 斐判  
兵 部判

荒木和助殿

神並三左衛門殿

此外に道益父子料理人岡田善兵衛へ毒藥を調合し勤めい大事他

伊達大騒動

然る事疾けが言をくし場上の状言致す間敷といふ神文二通外に遊刑状一通又品川隠居よりの書

伊達大騒動

り立て……と怒られたました流石の甲斐も差俯向き一言半句の詞

伊達大騒動

両を興へて原田若し仕損ずればかならず詮議に達ふ其時は松前鐵之助に頼まれて斯くの如しと言ふべし其松前方より權六を頼みの謀書を拵らへまして之れを權六の襟に掛けさせました甲斐は差料の不働國行の一刀を彼れに取らせまして安藝を刺殺さんどその機會を待つ内三月十九日の夜風雨烈しく最と騒がしき折りなれば之れ屈竟の時ありと權六は出掛けました此方は忠臣の人々龜千代君の側に向候致して居りました蜂屋六左衛門は毎年前元より蒲荷酒を取寄せますが今年も送り來りしとて自身は前にて毒味致して奉つりに龜千代君少し召上られまして後ちには龜千代父上綱宗公は酒ゆへに身持悪しく成り給ひしゆゑ酒は香まいと思つたなれどこの酒は六左衛門が志ざしを呑んで見たが保護の爲めには宜き酒じや斯の如き酒を予が爲めに苦勞をする彼の安藝に香せて遣りたいの……と最と有り難きは辭

伊達大騒動

ばに前侍りし人々は思はず涙を流しました實に梅權は二葉より香しく在します鐵之助は進み出でまして松前斯の有難き志ざしを片時もはやく安藝へ知らせ彼人の心を慰めたり某し使ひに罷り越しませう一ツの瓶子を持ち來り酒を入れました之れを携さへ風雨烈しさを厭はず安藝が住居へ參りました安藝は今しも癡所に入て臥せし所なれば松前は右の情實を語り終つて彼蒲荷酒を其所へ出して松前幼君の賜物イヤきこし召れよ……と聞て涙を流し拜禮して是れを頂戴しました暫らく四方八面の話しに移ります折しも彼の赤川權六今宵そと屈竟の夜なりと忍び込んで居る安藝が住居内の舉動を伺がふに安藝は鐵之助と差對ひにて話して居ります權六は兩人がら終に面てを見知りませんが甲斐が激示ました通りなれば此奴等兩人ながら撫切りにして呉んど戸を蹴破つて所つて入りまし

伊達大騒動

たゞれと見るより次の間より進取刀にて中野左太夫が駈け付  
け見ればはや此方は松前鐵之助彼曲者を引組み捻倒さんと致し  
居りますすが彼れも頗る豪勇にて鐵之助を捻倒さんと致します  
されども松前は聞ゆる大力の豪傑なれば事どもせず忽ち捻ぢ  
伏せまして生捕りました安藝は笑つて安藝汝と等が類ひは夏  
の虫飛んで火に入る蟻への如しみな之れ天命の然らしむる所  
汝はは奈何なる者にて何人の祿を喰ひ何の爲に刀を帶するや……  
明白に白状しろ……と言れて曲者赤川私まは麻布に住居致す  
浪人で珍座います此度松前鐵之助殿に頼まれ安藝殿を殺害致さ  
んと忍び入たる其情實は斯様々々と甲斐に教へられた通りを述  
べますと鐵之助は阿々と笑ひ松前汝は其鐵之助とやらに頼  
まれた事ならば彼の鐵之助の面体を覺へて居るか赤川奈何に  
も覺へて居りますす頼みの書状も所持して居ります……と聞て

伊達大騒動

松前汝れ何者に頼まれしぞ松前鐵之助は則ち斯くいふ某しな  
るう……白痴め……白状致さぬに於ては首打放すぞと一刀を引  
抜きますと鐵六はガタ／＼慄ひ出しまして赤川何卒命は珍助  
け下さいまし残りす白状致しますと言ふ時安藝は安藝イヤ松  
前氏曲者の穿議は左太夫に致させます先づ貴殿は幼君の側  
こそ氣遣はし先づ……珍助りなさるべし松前然らば暇ま  
しますると立ち去りましたが是れ又證據の一ツと相成りました  
扱て酒井雅樂頭殿は板倉内膳正殿を評定に除かんと致されま  
したゆゑ廿二日には松平安藝守殿江戸表へ珍若に付き内膳正殿  
を安藝様へ上使仰せ付られました乃で今日も對決の事なれば  
安藝は例の通り出頭して珍列席を見渡しますに内膳正殿が見へ  
給はず其時雅樂頭殿の中央に進み給ひ甲斐に對はれ酒井先日  
より數度の對決に汝はが分甚はだ暗し今日は一言も出すに及

伊達大騒動

ばす……と言れて甲斐は何か其意を察して平伏致しました。雅樂頭殿詞を和らげ、酒井コレ安藝汝に證據に致す言類残らず。之れへ出して見せよ……と承はりて、安藝畏まり奉ります。……と證書を改ためまして、今や酒井殿へ奉呈なさんとする折しも、障子の此方より板倉アイや其書物暫らく待てッ……と仰せられ、常用の趣むき首尾よく相勤先まして某し直ちに歸宅仕らんと存じ、いへども新役の儀にいへば斯る評定は後學の爲めにも相成る事と存じ推参仕つりましたと、伊會和つて安藝に對はれ、板倉こりや安藝陪臣の身として天下の大老職へ直に書物杯を渡し、仕り段は甚はだ無禮の至り、其爲に目付も列席罷り在る妻木彦右衛門等へ相渡し、其上我等受取り吟味を遂げたる後、酒井殿へは委細に上る事に是れあるぞ……と宜ふを安藝は叩首し

伊達大騒動

て妻木殿へ差出しました夫より内膳正殿受取り給ひ、板倉こりや甲斐其所にて書合せを致せ……と仰せに是非なく認ためまして差出しました役人中、之れを引合して見給ふに元來同筆なれば紛れなき證據で、座います其時酒井殿は酒井こりや安藝汝は、甲斐が職を嫉妬の姿、顯然たるぞ……と仰せに安藝は妻木殿に對ひまして、安藝恐れながら上げます、が某し儀は仙臺の諸士多しといへども、家中に家門四十八伊達の上座を仕つります。安藝に座ります、知行も二万石、甲斐が知行は八千石、又私儀は陸奥守には縁者に座ります、甲斐は家來なれば某しが爲にも、家來にあります、之れを恐れながら將軍家に登へますれば、三家は、縁者酒井侯は、家來に在します、いか程雅樂頭様は、權威、んなれば、とて、三家方の羨み給ふべきやう之れなく、上げるも、俥、かり多くいへば、某儀は、伊三家と酒井家程の相違に之れあります。

伊達大騷動

る……と慮する氣色なくや上げましたので、列席の諸公も最と  
氣の毒氣に扣へられました。此雅樂頭殿は先づ大老の面汚しども  
謂つべし幕府の官吏に斯る人が總理の職を占たのは歎かほしい  
事では座います……

第十三席

其時原田甲斐は酒井殿に對ひ 原田此上は安藝と某し相拷問に  
仰せ付られた様願ひ奉つります……とやすを雅樂頭殿頭き給  
ひ 酒井願ひの通りや附るであらう……と仰せに内膳正殿は  
を進み出られ雅樂頭殿を尻目に掛け甲斐をハツタと白眼み給ひ  
板倉汝れ珍らしき奴かな……願ひの通り拷問に掛らんといふは  
汝れ悪心あるの證據なり最はや水火の責に及ばず伊達家の大悪  
無道の罪人は汝れなり……と大喝一聲宣へば天命なるか此時甲

伊達大騷動

斐が面色は忽ち土氣色に變じ戰慄き震へましたのは見苦しき  
事警へん方なし一言の才譯もなく平伏致しました積悪忽ち  
願はれしは悪の將さに滅びんとするの時來りましたものか内膳  
正殿は酒井殿に對はれ 板倉外々の儀は兎も角龜千代を尖あは  
んどせし事此大逆のみにても免し難し……と聞れて 酒井先づ  
罪科は後時の沙汰に致すべしと其座を立れましたゆへ列席の  
方々も退散致されました其夜酒井殿は甲斐を召寄せられ 酒井  
切て今日の評定にて事落着と相見へたが汝れ心る残りの事あれ  
ば手に開せよ宜しく計らひ得さずべし……といふ仰せに 原田  
道は有難き意を蒙りいかに感銘に堪へず某し何も残  
り多き儀は座なくいへども謀計空敷相成り安藝を其儘に生し  
置く事甚はだ残念の一ツに存じ奉つり升と聞れて 酒井予も其  
儀を察し入る今一應對決を願ふべし其上にて汝れが心残りのな



伊達大騒動

きやうに致せ……と仰せられました甲斐は歡喜びまして暇を  
乞ひ退出致しました其夜兵部殿方へ参つて雅樂頭殿の心成を委  
しく語りまして歸宅致し自己が家財等を取片附けまして頭りに  
準備を致しました斯くて三月廿五日となり雅樂頭殿は老中其  
他列席の役人中へ送られすに「来る廿七日某宅におゐて  
甲斐安藝對決今一應願ひ申すに「来る廿七日某宅におゐて  
らに願ひ出でゆゑ各位も太儀ながら出席之れある様にと願  
られました時に土屋但馬守殿下城の折から久世大和守殿に  
逢ひなされて但馬守殿は土屋來る廿七日には甲斐が再願の由  
を酒井殿より觸られました彼甲斐儀一旦伏罪致し又再願を致  
すとは公儀を恐れざる所爲不届極な奴でありませぬ久世成程  
仰せは然る事あれども當時大老酒井殿の仰せ付けなれば貴殿や  
我等は其席に列あるまでの事では座る……土屋仰せの通りで

伊達大騒動

是れが時に隨がふので座ると話しなされましたが内膳正  
殿は直に雅樂頭殿方へ参られまして面會の上板倉甲斐儀伏  
罪しなから再願致しゆし之れ聞老はもとより公廷を恐れざる  
大罪人で之れあり升る最早再對決に及びませぬ酒井成は  
甲斐儀不届きなる願ひなれども殘せし事あるとか只管願ひま  
すゆゑ止事を得ず來る廿七日對決や附けました一旦某し申  
し事なれば反古にもなりませぬい苦勞ながら貴殿にも出席  
下されたしと言れて餘儀なく内膳正殿も承諾せられました扱  
いよ廿七日になりませぬから安藝は身裝飾致して立出でま  
すに顔色甚だ悪しく龜千代君へ目には掛り思はず涙だをハラ  
と鐵之助は不思議に思ひませぬ松前今日の評定は奈何心得給  
ふ安藝甲斐既に先日の對決に閉口して今日何んの中譯けがあ

伊達大騒動

るべき 秘前イヤ 勝て兜の緒を締めよといふ事あり今日こ  
そ一大事にあります萬事に心を附けられいへ……と言つゝ見  
送りましたたが之れ今生にて主従同胞に別れます事とは後にも思  
ひ合されましたが扱て附添ひますは柴田外記古内志摩此兩人は奉  
行職では座います又留守居役蜂谷六左衛門同道にて立出ます時  
鐵之助は柴田蜂谷の兩人に對ひ 秘前萬事に注意を願ひたし  
蜂谷委細心得ましたと聽て雅樂頭殿の館へ参りました扱例の通  
り諸役人列席にて双方呼込みにありました其時雅樂頭殿  
は甲斐に對つて 酒井其方儀先日や殘せし儀之れある山再應の  
吟味相願ひたるが今日の首尾了してよ 原田有難き尊命覺悟仕  
りい……安藝は甲斐に對ひ 安藝汝と先日伏罪致しながら又も  
や今日何事をいはんとする 甲斐何をもちて伏罪とやさるゝや  
安藝神並三左衛門が手より得たる所の一札は奈何ん……

伊達大騒動

妻さればろの一札こそ心許なき事あり 安藝汝とが重き判を捺  
へ心許なきとは迂論なり又歴々の名を盗みたるは奈何汝と是  
れを言擦り自己が過失を免がるゝとも其罪を人に負せんと思ふ  
か實に卑怯未練の覺悟なり汝とも原田與五郎が末葉ならずや……  
見苦しき所存あるべからずと云れて甲斐も赤面し詞もかくして  
差俯向きましました 安藝それ何んぞや汝とが罪條は如此々に  
して今更何んの中譯もなきに台命の儀方様に苦勞を掛け奉つ  
りし大悪人公儀を輕んずるの過失少なからず其所罷り立て……  
と膝立直して白眼みつけました諸役人送いに顔を見合せられて  
居られました其時酒井殿 酒井兩人の者暫らく休息致すべし訴  
たへあらばや上ぐべし古内志摩は奥へ参れ……安藝と甲斐は酒  
井殿の廣間の次に罷り在りその次に二夕間を隔て、柴田外記其  
次に蜂谷六左衛門は又一夕間を隔て、居りました此時甲斐は座

伊達大騒動

中を信と見渡しまして安藝に對ひ原田安藝殿何卒此書付を今  
一度抄披見なした下さるべし其上にて奈何様とも貴殿の存分に  
相成りますると言つて書付を左りの手に握りまして安藝が側へ  
ツカ／＼と寄りました安藝は其書付を左りの手に受取りまして  
之れを開き見やうとする所を甲斐が脇差を抜て原田汝れッ  
と發矢と斫る肩先より乳の下まで只一刀に斬下けました安藝  
推參なり……と脇差に手を掛けたり朱になつて相果てました  
哀れむべし安藝宗重今年五十八歳を一期として幼君の爲に命を  
大老職の役宅に落しましたのは古今稀なる大忠臣で伊達さま  
すその時甲斐は血刀を引提げたまへ奥を目がけて馳入らんと致  
しました柴田外記大いに驚ろき外記甲斐何方へ往んどするや  
外記此所に扣へたり汝れ近すべきやと脇差を引抜馳寄る奴を甲  
斐は回顧して白眼つけ原田汝れ妨たげをなすかど云ひもあへず

伊達大騒動

拜み膝に撲地と斫る真向をしたかには所割れました普常の着な  
れば即死すべき重疵なれども勇猛不敵の柴田所られながら踏込  
んで甲斐が肩先へ斫りつけましたが彼れは豫て着込を着せしゆ  
其刀貫らす柴田は猶も斫りつけを引外して捕つて押へ膝下に組  
敷く所を蜂谷六左衛門驅付けて背後より無手と組む甲斐は外  
記を押へながら六左衛門を逆引搦んで二間ばかり圓轉倒と投  
け附る其間に下なる外記組敷れながら甲斐が下腹の邊りを一  
刺貫す突れて甲斐は少しもひるまず其刀をもぎ取つて外記を一  
刀突きます所を六左衛門又後より取附き捻ぢ倒さんとする  
時雅樂頭殿の家來石田彌右衛門太田彌兵衛駆け來つて六左衛門  
を左りの肩先より乳の所まで斫りつけました之れ甲斐に助太刀  
と相見へまする六左衛門も深疵を負ひ外記も半死半生の容体な  
れど強勇の外記甲斐を放さしと帯を取つて片腹を刺貫しました

伊達大騷動

流石の甲斐も是れに弱つて搦と倒れました雅樂頭殿の家來大勢  
が群がり來つて散々に斫り附けました又六左衛門は右の眼の上  
に三寸ばかり切込れ少しひるむ所を又右の腕を斫つて落され  
ました此喧嘩に酒井殿を始め列席の役人衆中の居給ふ所  
まで其間距離も遠からず各々驚ろき給ふ中に内膳正殿は喧嘩の  
場を見やりも爲給はず面色も少しも變らせ給はず古内志摩へ  
用の事を仰せ渡されました酒井殿は只茫然として居られました  
サア此喧嘩誰とも知れませんでした酒井殿の内外に掛へ居りまし  
た此役人方の供廻りの者驚ろき騒ぐ事一方ならず皆な自己が主  
人に怪我ありてはど我劣らずと立關より廣間へ大浪の打寄せま  
す如く押し合ひへし合ひ土足の儘に駆上るを玄關の諸士大音を  
發して制すといへども更に聞入れず實に鼎の沸くが如く凄まじ  
き形勢で浮座います此時雅樂頭殿の嫡男酒井河内守殿當年十八

伊達大騷動

歳にならせ給ひ父上の行状ひ宜しからざる事を日來愁ひて居ら  
れましたが今此容体を診覽になり長袴に掛けたる二間柄十文字  
の槍を御々引しとさ玄關へ馳せ出で、高らかにゆされますに  
河内何れも承はれ……今日この喧嘩は松平總千代家來伊達安藤と  
相人は同じく原田甲斐なるを獲りに騒動に及べば此河内守が相  
手なるぞ静まれや各々……と呼はり給ふを聞まして諸家の侍ひ  
漸々安堵致しまして忽ち静かに相成りました河内守殿はうれ  
より喧嘩の場所へ臨まれて見給ふに甲斐が死骸は散々に斫ら  
してありましたゆゑ茲に包ませまして裏門より捨させ若し死骸  
を貰ひに來る者あらば知らせよと仰せられました柴田外記は重  
傷なれども未だ息絶へず畏まりて両手を膝の上に置き隣み居り  
ままた河内守殿之れを見給ひ河内不慮の事にて手紙を蒙り  
せも淺手なる予氣を慥かに致せ……と力らを添へ給ひ浮近習に

伊達大騒動

申し付けられぬ。醫師山本快春を召れまして、即刻治療に着手し、また、老中稲葉美濃守殿も、両度まで此血だらけの場所へ入来になつて、外記を介抱り給ひ、その内將軍家の侍醫師栗本道宇を招かれて種々診手當に相成り、ました内膳正殿は外記に對つて板倉可憐忠臣外記此深疵にては治療も届くまじ……汝等必らず恨むことなかれ、若し彼れ死物狂ひになつて老中へ對し、狂言を働らけば、龜千代殿の爲め悪かるべきに、汝等兩人が死をもつて防ぎしゆゑ之れにて治されり、士たる者は斯る時にこそ捨べき命……實にあかやり者であるぞと仰せられ、古内志摩を見やり給へば、志原は赤面致して居り、ました、雖て内膳正殿は、印籠を取り給ひ、板倉是れは午王清心丹なるぞと、珍手づからに外記が口へ含ませられ、ました、外記は無言にて押蹴だきました、した内膳正殿は、板倉龜千代殿は大果報の人といふべし、斯る忠誠の士あつて、其家を慕

伊達大騒動

山の安きになさしむ、我不會なりといへども、閣老の名を稱す此良薬を汝に末期の水と思へよ……と外記六左衛門の口中へ入れ給ひしは、仁あり義あり、徳川家の智臣と稱され、ますも又宜ならずや、然る程に伊達家へ此事が知れ、ましたので、追々に駈け付けました、中にも外記の家來に岩淵市之丞といふ者、内玄關へ斷つて外記の側へ來り、岩淵主人……仰せ置かる、事座らば小生へ仰せ聞け下さりませ……と聞て外記は眼を見開き、まして外記主公のおん爲めに命を捨る事此上なき幸ひ併し、大老職の館へ陪臣の身として、穢さん事、誠とに恐れ多し、疾々我が骸を門外へ取出し、呉れ汝に、が肩に掛り、珍立、關まで出でん……と立上らんと致し、ますが深疵なれば、相叶はず、怨を持來り、乘れといふに不禮なりといつて、乘せせん、ゆゑ内膳正殿、美濃守殿も、彼れが心を察し給ひ、其座を立ち退かれ、ましたので、漸々怨籠に乘せ、ましたが外記は、怨

籠の中にて 外記此所は何所ぞ 岩淵門内……と答へますと  
黙頭さますのみ 籠て門外へ出でますと息が絶へ果てました六  
左衛門は初籠に乘んとする時に息絶へました此外記は四十七歳  
六左衛門は四十五歳で座いしました時に酒井殿は 酒井龜千代  
家來も某し宅とはいへど今日は天下の評定所なり然るに狼籍  
に及ぶ條言語同断度罪科中付けべきなり……と仰せに 板倉  
仰せゆ道に引へども此度の儀は甲斐一旦罪に伏したる上罪科  
中付くべき所延引に及びそののみならず再願致し斯く騷動に  
及びました事は此席に列ありし役人の越度此上は各々遠慮致し  
將軍家の下知を待つより外の事なし奈何なされまする……と  
云れて雅樂頭殿一言の返答も出来ません大和守殿が 久世此儀  
將軍家へ達し奉つれば龜千代の爲め悪からん然すれば家來共が  
犬死同然まづ穢便に致されて然るべきかと某しは存じますると

仰せに列座の諸公も是れに同意して内分に致されましたが實に  
雅樂頭殿の失錯で座います然れば伊達家にては松前鐵之助  
岡の兩人より廿七日の四ツ時に仙臺へ急飛脚をもつて此大事件  
を報知致しましたその道程八十六里を三日間廿九日の未の刻に  
仙臺へ到着致しました……

第十四席

片倉小十郎は松前淺岡の飛騨を披見致しますと即時に馬に鞭  
つて家僕六七人を引伴れまして仙臺の城へ馳付けました然るに  
仙臺にも注進がありましたものと見へて第一番に伊達安藝が  
子兵庫列を設けて扣へ居りました小十郎は兵庫に對ひまして  
片倉江戸表の珍事傳父の涉不幸覺悟とは言ながら驚ろき入つた  
次第涉愁傷の至りに……と涙に咽びました兵庫は涙を止め

伊達大騷動

て 兵庫國の爲に死する親あり父の譽を報ずる事能はざるの子  
あり 片倉某しども別懸なるは他に異なる所るの良友然し渠  
は家の爲め之れは國の大事にして江戸表の事原田が子供等に洩  
れたらんには一味同心の族數多なれば此上の珍事計り難し先づ  
潜かに江戸表へ人を遣はし公儀の裁判を探らせん事こそ第一に  
して籠城の人数を集むるにも及ぶまじ萬事穩便に計らひすべし  
兵庫只今も彼一味の輩此事を聞知らば不意に起らんも知れ難  
し常城堅固の謀計ころあらまはしくい……と聞て小十郎より廻  
文をもつて集めました人々には石川駿河伊達上野同安房同彌正  
同頼母石貫越中白石將監等を始めとして追々に馳集まりました  
然るに伊達式部大條勘負吉田甚五兵衛田村内蔵之助福田五郎左  
衛門等は病氣と稱して催促に隨がひませんが小十郎は江戸表の  
珍事を委細に告げまして諸士の心底を問はれました其とき石川

伊達大騷動

駿河進み出で、石川斯の如く事あらんを期して宗重一言を殘  
したり我が輩何んぞ之れに背かんやと聞て安房上野を始め一同が  
決心の容体に片倉は大いに歡喜ひ二村次郎左衛門伊達齋宮の兩  
人を江戸表へ趣むかしめて當家の安否を窺ひ速かに注進すべし  
とす付け此趣きを早速松前淺岡方へ飛脚をもつて遣はしまし  
た扱て江戸表の左右を相待ちます内飛脚をもつて龜千代君自身  
の上は安泰にして公儀首尾よく近日中出勤あるべきよし又國許  
の儀は小十郎に任せらるべき旨彦老中方へも内意之れありし  
趣むきを聞て皆々安堵の思ひを致しました片倉は潜かに家練の  
内にて山中新藏深山武兵衛松井郡兵衛の三人を呼出しまして  
片倉汝と等日來の忠義を知るに依つて大事をす附る……開は餘  
の儀にあらす原田兄弟が居城信夫へ至り我が密事を行なふべし  
其事は如此々なりと委細に言合めました彼三人は委細承諾致

伊達大騒動

して信夫の城下に参りました三人の者は信夫の城を窺ひ見ま  
すになか／＼用心堅固に構へました。雖も門前に進みまして山  
中某し等は片倉小十郎が家來山中新藏深山武術松井郡兵衛と  
予者に之れあります。主人小十郎より潜かに差越れられた使者  
此段原田兄弟へ通達下されたし……と相違へました。仍つて  
此旨を大内藏兄弟に告げます。大内藏此方へ通すべし……と  
雖も對面致し大内藏切片倉殿の使者とは奈何なる趣むきなる  
か承はりたし山中小十郎口上の趣むきは此度不慮の事に付き  
甲斐殿の涉不幸是非に及ばず夫に付いて兄弟の面々籠城の沙  
汰承はり尤も涉親父の罪を糾さるゝ時は遁るゝ所ろなしと  
いふ思召しにや奈何……然れども退ぞいて愚案をするに幼  
稚の思召し此度の事知り給ふ所ろにあらす何の恨みあつて主君  
へ對し弓を引給ふ様の事は今更慮忽の至りにいは兄弟にも決

伊達大騒動

して有るべからずと甲斐殿存生の内他事なくやされし所ろな  
り朋友の交誼は斯る難を救ふ事を専らと致しし身熱々思案  
致さるゝ様主人や付けに之れあります。然らば某し等一身に替へ  
ても身命の程は予預かりはん何卒便に及ばれ度儀にいは  
一門の衆某しが居城白石へ移りければ幾回も主人小十郎身に  
替へまして願ひ立いはん兎角年月を送られ内には主君成長  
遊ばされ理非の辨まへれば譜代の原田家見捨はあるまじ  
加之甲斐殿の不義たる各々存せざる所ろは某し能く之れを知る  
所ろ弟違の事は猶更他の家督格別の様に存じし此趣きを得  
心なれば潜かに白石まで越し道に予んじし小十郎身不肖な  
がら斯く潜合すに又某等は斯くや送る事至て隠密の事なれば他  
め悪敷は仕るまじ又某等は斯くや送る事至て隠密の事なれば他  
人の知らざる儀にてい……と述べ畢るを聞て原田兄弟も稍歡喜



伊達大騒動

びました体にて 大内蔵片倉殿の厚志今に始めざる事禮謝は  
同に盡し難し然れども卒爾に返答も相成り兼ます暫時休息せ  
らるべしと三使を客室へ請じまして兄弟は老臣片倉山主人を招き  
片倉の使者の趣き如此々々と告げますと 華人其儀誠に宜し  
からず某し察するに今小十郎君等を助るを名として手取にせん  
といふ計略なり能く考へられよ安藝が一子兵庫俱に天を戴か  
ざるの仇とせり殊に大老の館を懼からず刃をもつて人を害す元  
來父君は兵部殿隨一の味方なり兵部殿の罪既に事破れて板倉殿  
を懼からず家の破滅も返り見ず是等のまぬがれざる罪あり依つ  
て今片倉よりの使を所捨て討手向はん時一矢を放して腹揺切る  
こそ之れ大丈夫の爲す所る必らず人の同に迷はされ給ふ事なか  
れと恐るゝ景色なくすしませゆゑ 大内蔵其方が辭道理なれば  
然すれば猶々我家の悪逆の名を取らん又片倉の使者の命を断つ

伊達大騒動

事甚はだ情を知らざるに均しと華人を退すけまして四人の兄弟  
一同に片倉の三使に對面して 大内蔵片倉殿の懇情禮謝するに  
餘りあり然るに家來片倉山主人深く之れを疑がひ謀計ならんと言  
へり我等奈何んどもなし難し 山中主人小十郎儀は伊達家の補  
佐として普ねく政事を掌るに一言の差ひあれば人争でか之れ  
を用ゆべき今此事を某し等に托するも則ち補佐の一言を傳ふ  
るものにて謀計を用ゆるの儀に之れなしと聞て兄弟も打點頭さ  
大内蔵然らば貴殿等誓紙を致されよ……と聞て元來覺悟の事な  
れば異儀に及ばず纏て之れを認ためて差出しました兄弟は歡喜  
んで既に三使の同に隨がひましたを知らず華人は出で來つて主  
人の前へ進まんとするを屏風の蔭より關本刑部躍り出で、抜討  
に所附けました肩先より右の腕を切落しました二の太刀を切込  
むやつを身を轉して左りの手にて關本を取つて投げ附けまして

伊達大騷動

其の上に乘掛り聲荒らげ 隼人愚昧の者ども能く聞くべし某し死すれば兄弟の人々思ひ知り給ふべし之れ甲斐殿の志ざし天の罰を得給ひしゆゑなるべし……と言つゝ刑部を刺通し其刀を取直し自己が胸元を差貫ぬいて果てました兄弟四人は却つて之れを歡喜ひ早速に片倉の使者に頼みませゆゑ此趣むきを白石へ申し遣はしました乃で小十郎方より野村治兵衛赤井徳兵衛林刑部金崎彌惣右衛門の四人を撰み城外に橋物を一人々宛伴なひ出でまして大小を預かりまして直ちに白石へ引取り種々響應しまして其後小川縫右衛門といふ者より小川兄弟早速の心得心主人小十郎にも悦び入江戸表静謐の上ゆ一命の儀は申し有ゆべしし伊達の物は上への遠慮に之れありませゆゑ相渡しゆさす……と送り者頭四人へ一人宛預け置きました小十郎は國元の事は先づ安心と石川駿河伊達上野等に托し置きましたして四

伊達大騷動

月朔日に白石を發足致しまして三日に芝の屋敷へ到着致しましたたが家來も五六名なれば誰も片倉とは氣か付きません然るに四月の三日伊達兵部少輔宗勝を召喚なりました伊達兵部少輔

先陸奥守病氣ゆる其方并びに家中の者共隠居の訴狀を差出す依て願之趣さに任せ仰渡され其方と田村隠岐守事一族たるの儀に付き松平龜千代後見仰付られ家老とも相談及び守立の様仰渡されし處我意を働らき其外家士共と不和に相成り燕を結び家の仕置年々猥りがましく刑罰の族多きゆゑに家中安堵の思ひをなさず依て伊達安藝龜千代の爲を存し出でし處に原田甲斐の狼籍前代未聞の不屈偏に兵部覺悟惡敷ゆゑに依之急度仰せ渡さるべき筈なれども格別の涉慈

伊達大騒動

悲をもつて死罪沙宥免士佐の泰へ流刑に處せらるゝもの也

四月三日

右の如く仰せ渡されましたので兵部一言の詞もなく赤面致しま  
した依つて松平土佐守殿へは通達がありましたゆゑ山内家の家  
士青細引を掛けたる駕に乗せ囚人の扱ひ兵部が妻は舅の飛彈方  
へ預けられ子息市正は小笠原遠江守殿へ預けられ市正の妻則ち  
雅樂頭殿の娘は伊達上野に預けられ兵部が家來共は仙臺へ引取  
り夫々罪を糾されました又同日相後見田村隠岐守殿を召出され  
まして戸田伊賀守殿より仰せ渡されました

田村隠岐守

其方儀先年龜千代後見被仰付兵部少輔と相語かひ守立の様  
千代爲を存じ申出所原田甲斐不屈の働き打果し申言

伊達大騒動

語同断の至りに然れども其方久敷在所へも罷下らず諸事  
兵部少輔一人に任せ置い段宜しからず儀に思し召ひ依之  
閉門仰せ付られ申旨申渡す……  
と仰せ渡されました田村隠岐守殿 田村承知奉つり其儀  
千代後見不埒の段重科にも仰せ付られべきを宥免あらせられ  
重々有り難く存じ奉つり申す……と此受けを致して退出せら  
れまし扱て翌四日に稲葉美濃守殿より龜千代執職の者罷り出  
づ可き旨奉書到來に付恰度昨夜出府したる片倉小十郎が罷出  
でました美濃守殿は小十郎に對ひ細葉傳へ聞くに伊達の領分  
細部に石納せざる事頗ぶると其方は補佐の職なり概略を  
聞たし……と宣ひました小十郎答へますに片倉仰せの如く國  
廣くして侍ひ多く某し具さに存じはすといへども先づ陸奥守  
家士に與へます所るの知行高五百万石程も之れありませう……

伊達大騷動

と聞給ひ 稻葉コハ騷たしき事かな聞しに違はずと重て問給  
はす片倉に傍暇まを給はりました小十郎は館へ歸つて諸士に對  
ひ片倉事に既に定まれば最早伊達家別條なしと即日羽檄を飛し  
て仙臺へ如此々々と告げ知らせました果して其月末に龜千代殿  
へ上使を下されました上使島田出雲守殿式の如くに入來に  
なりました依つて小十郎は龜千代殿に附從ひまして公命を承は  
りますに出雲守殿 島田上意の趣き謹しんで承たまはられよ  
其方儀幼弱に付田村隠岐守伊達兵部少輔後見付けし所  
に兵部少輔我意を振舞ひ家法を乱す是に依つて伊達安藏儀  
其方爲を存せし出し所原田甲斐大老の宅にて老中を始  
め諸役人列席の所にて白刃を抜きて安藏を害しし段不届  
千萬に思召し召し出され殊に其方幼弱ゆへ家の政事に  
政宗の忠誠を思召し召し出され殊に其方幼弱ゆへ家の政事に

伊達大騷動

拘らざるゆゑ六十二万石其儘下し置れいものなり  
と仰せ渡されました龜千代始め片倉以下の家士歡喜事限りな  
く龜て上使は歸りました乃で早速に仙臺へ遣はしました老  
中稻葉美濃守殿より知行高を尋ねの返答に依つては國替に仰  
せ付られべき爲でありましたなれども小十郎の答へ廣大なりし  
ゆゑ其まゝに下し賜はりましたは伊達先祖の餘慶ども稱すべき儀  
でありませう小十郎も伊達家を給はつて仙臺へ下りまして家來  
山中松井の兩人をもつて原田兄弟方へ遣はしますに「足下等  
の命を助け進らせんと存じしへ甲斐儀大老の宅を恐れずは役  
人衆を顧す其狼籍前代未聞の不屈の事にて以ての外の阿り  
なれば奈何とも致し方なく是れ天命と歸らめ給へ……と言聞せ  
まして縛しめられ残らず首を刎られましたは遣は三族を絶すと  
も他足らん逆賊の連累なれば又陸方がありますせん乃で逆徒に組